



繪入
註解

あのこけい
實語教童子訓

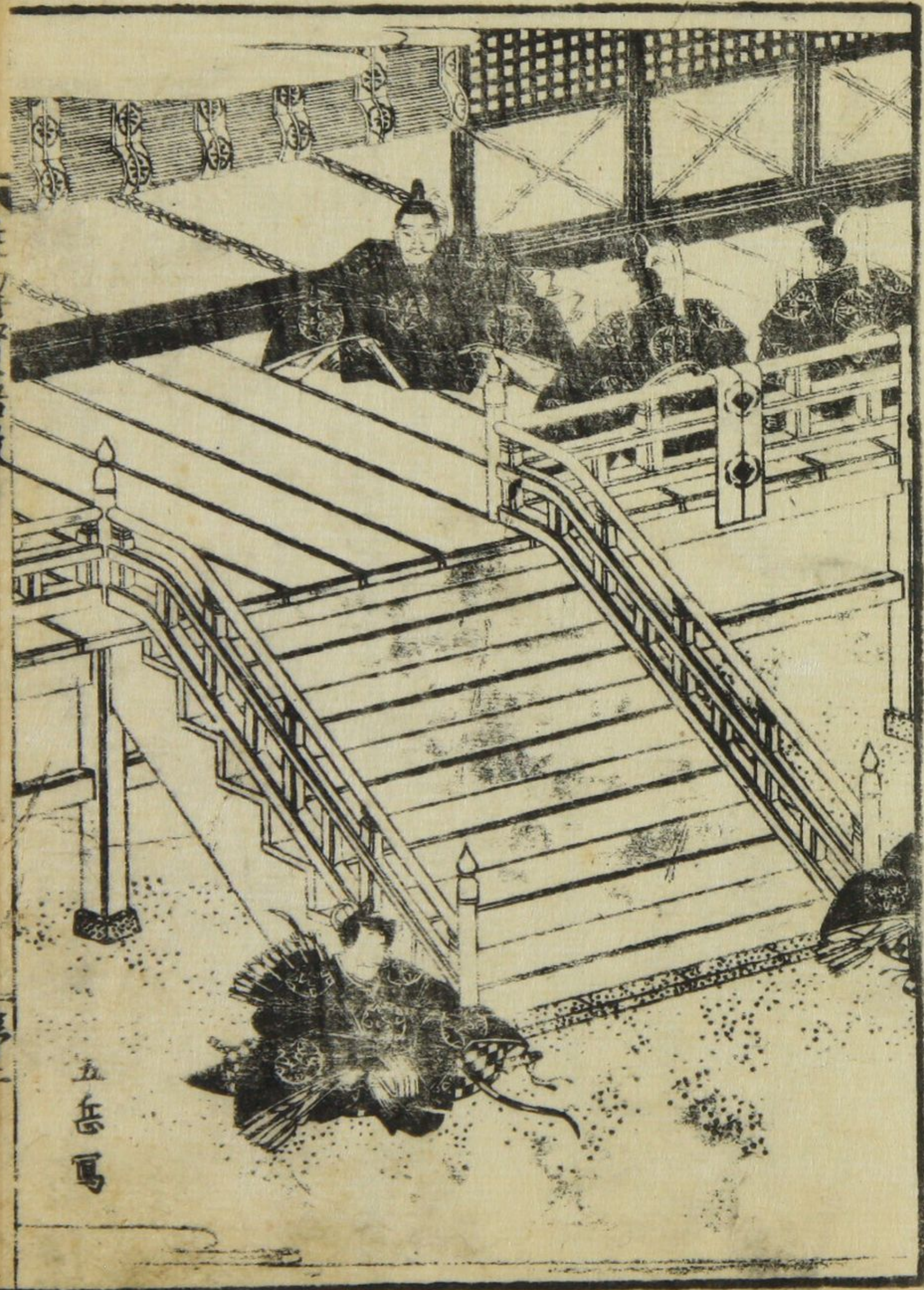
新
全
教



萬丈の山を攀くも原一貫の切ふ葎や千里に遠く
 行も一足と発するふ始る学文の廣大なるもいふは習
 ひ初るふ有然と幼子のころ人先六七歳のあはれ
 膝の下ふ席をがくせしむるも明諷する習ふ此兩教
 を能く教く讀むべし然して好四書五經をも学びたる
 覺るふ便有なる詩書学さむと門戸俗なり子ふ教へ
 ざるは親の科なり人も世の学文をくまは僻事同原
 此書初学の為ふら双なるを記しをる平假名をりて註
 加へるい尚早く導かん為と知事

二上野實五五

一



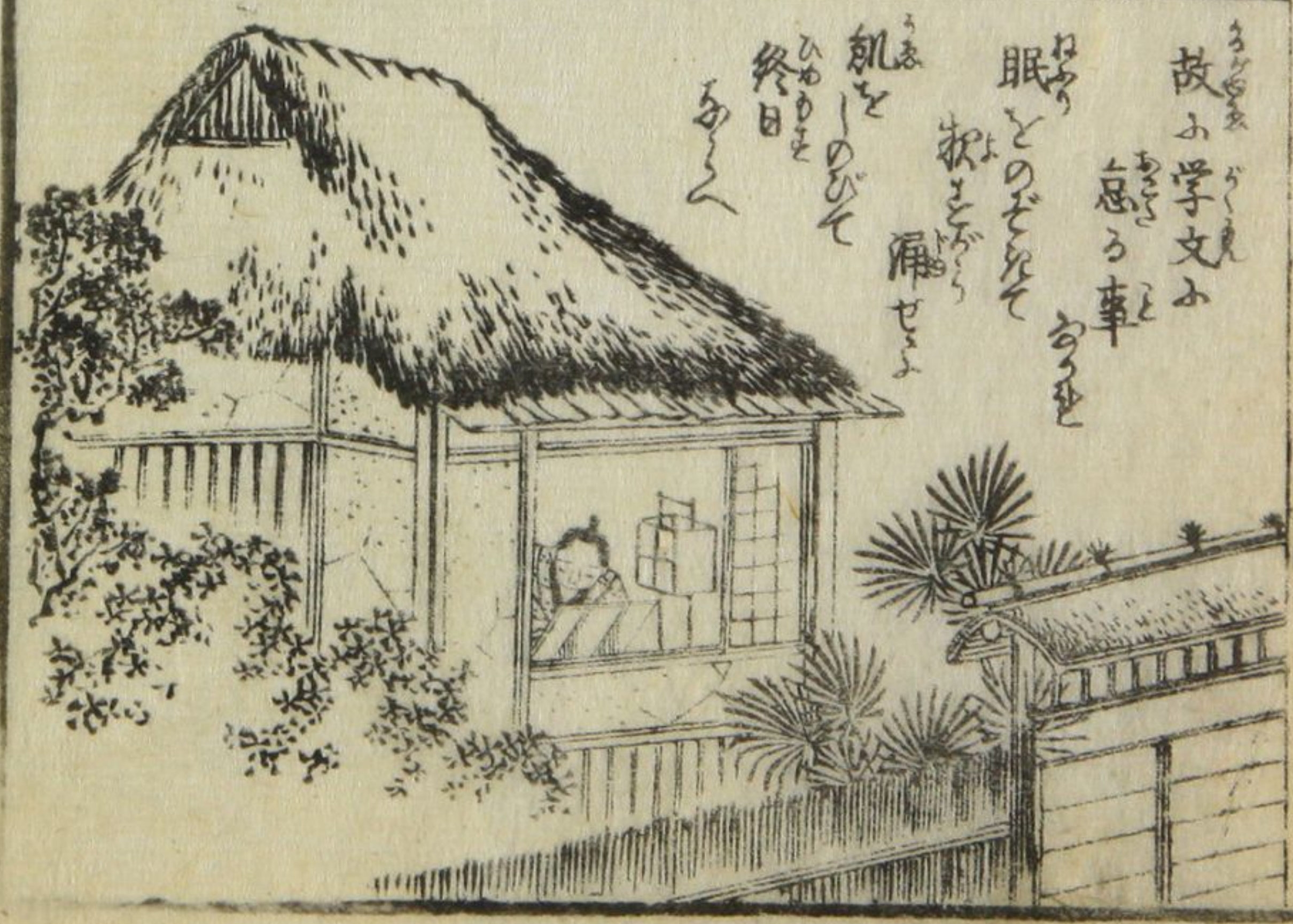
五岳寫



弘法大師
 帰朝
 泰内
 給ふの

○實語童子の兩教を何人作する事を知相傳へり
 弘法大師の作なりと云く或は奈良の護命僧止作ともいひ
 亦童子教を五大院の安忍和尚の製作ともいひ右あり
 を空海大師の作なりと云く文意のさうり明らなるる覆あ
 りて先哲も云いけり實は然るを彼師の作三教指歸なり
 秘府論性靈集亦あり競見多し然ども元来此書手なり
 こゝに小教んとて筆おほる所は如く綴らる給ふ所は
 強く疑ふも亦益なきなり最なる記書中より聖子傳へ
 記書ゆゑなり





實語教

卷第二十七正語
實語時語真語言
不虛發微妙第一

實語とははるの言なり儒及仏道亦の實語を集め
 童蒙の教にほる故小峽名とせり實語の二字は法華
 經涌出品に我今說實語汝等一心信せば又涅槃經に

人肥故不貴 必乃智為貴

山い高のやかりたかしの
 物でいへり樹木茂ると
 生茂ると有る多ふ

貴く見ゆるもの人も喰肥あり
 たゞくろて貴くいなむと才智學
 文あるへがたふのと云事あり

富是生財 身減則

共減

富の身下は金持の事ありのやかり人至持福者でも身減命終る
 時に至りて来世へ持てい行むす實小是一生の間の財より華嚴經
 普賢行願品に曰く至臨命終時珍宝伏藏無復相隨と有

智是五代財命必則隨行

智惠ある人の五代を名
が残て其人の作を言
物又其云ふける言

未の世を残りて貴美なる
白樂天の曰金は財は終以成
他物智是宝亦宝後必生佛國

玉不應空光 無光

為瓦人不學空智 無智為愚人

禮記の学記に玉不琢不成器人不学不知道とあり玉は石の中に
ありて有りのる石の中より琢れ出でて能磨りて玉の如くなる磨ぬこ
る光が出で光が無き石瓦も同じ事なり人も其如く端学文をて魂を
磨く時ハ智者も賢人も出来らる其学も
智も無もの石瓦と同じ愚人も六度經に曰
倉内財有朽
人無戒如石瓦具戒者如明珠といへり

身内才長朽

財はたからと云字あり倉の内小貯持る財ハ朽る
事もあり或ハ火難水難ハあひて滅る事あり
と学文して身は出来才智ハ藏して置ても朽む

智惠を出て用は用るむ増のり
韓文小曰金壁雖重宝費用難貯
儲学問藏之身身在則右餘

惟積千兩金不如

日学

千金を貯へるより一日の学文の方がはやくと云事あり学文とことばハ
儲日本昔の事は悟り覺え我身持の正くに我の才を覺る
結好みのぞ淮南子ハ聖人尺の壁を學ばせて寸陰を重んず

と見たり是ハ宝の壁を學ばせて學問ハ寸の陰をもすむ事あり昔の陶
侃といハ人知少なり学を好む成長小隨ひて常に人ハ語りて曰大禹ハ聖人なり則
寸陰を惜む況や凡俗ハ於をや分陰をも惜むべしと云り前漢書韋賢傳
おも子に黄金滿籬と残けのつふかど
さんより一經を教んず不如
兄弟常各慈恐兒

身

兄弟といふもの左右仲なりける物あり世話の兄弟他人の始りと云り然
ども慈悲心直小深けむ中睦くする他人もその兄弟の如く親なる物あり
論語小君子敬而無失与人恭而有礼四海之内皆兄弟也又

左傳小意合則具越
相親意不合則骨
肉為讐敵あり

財物永る存 才智の財物

不存いたるすも財物
ひるく存ぬる才智あり
まても損せぬ財のりや

四大日々衰 心神軟弱暗

四大と云地水火風大凡大もの四ツの物人の身と云て揺れ働くは圓覺經に見
る人の身肉毛皮齒骨の類ハ皆地より汗涙つと血涎大小便の類ハ水
より身の暖り火より揺れ働くは風より此四大年老小隨ひ日々に衰る也

心神いへぬひ也心神夜々くくくするもの
阿含句解十二因縁經人羊老識女忘
言のり識と佛書したるひの事なり

初時不動学老

後雅眼悔 尚無有亦益

文を勤むべ大學の序人生きて八歳ありて小学に入るとのり幼き時より学文を
勤めどやうくと遊ぶに何一ツ知ぬ身とるの年老て得何ク困りむし学文を
ざり事を恨と悔ても一向小益は古文前集沈休文が長行歌子女壯不努力

老大徒悲傷すしあり陶淵明が雜詩小曰盛年不重來
日再難晨及時當勉勵歲月不待人まご司馬温公が
勸学歌小汝等各早脩莫待老來徒自悔としり

故續

書勿倦 学文勿怠 除眠通教誦

思飢終日習

是の前の文をうけて味と辛老てハ学文の勤み
物も急壯壯回小書と讀て倦るにせ及意のやう
に夜も眠らば誦誦終日も飢のささるる

出精して習ふべしとの遺教經に曰く
中夜誦經以自消息無以睡眠
因緣令中一年空過無所得也

維會師學徒也

向市人

師といふ人の事を教へ世のほごひと解人を云ふる市人といふ町
商物を賣買する雜人を云ふる俗に死師の出會るる何事を
も向て是ふ學びざるに死の彼市人出會るとも同やうものトヤ

維習護不復只如斗階財

復といふる返して護
事あり論語に南容
三復日主といへるも

孔子の弟子に南容と云ふ人白圭といふ詩經にあり事を一日三度復しては詠
事と云ふる然の事を護でも能復して得と腹の中へ入る時に入用の時忘せて
云ふと壁言の隣の店に金銀の勘定を手傳と云ふ物で我讀でつる益にこそ
是と隣の財と云ふるはしと云
天台大師文に云く日夜
教他宝自魚半錢分
君子を智者と小人を愛

福人

君子といふ善人又の道徳あり人といふ小人といふ凡俗といふ君子の才智學
あり人といふとて友といふ凡俗の利欲に足る故金持の福者を愛し
て誦ひ親し論語に君子喻於義小人喻於利と皇侃が疏ふ

喻の曉るりと然の君子の仁義を曉る小人の利と
貪る事小曉ると云事あり范甯が云棄貨利而
曉仁義則為君子曉貨利而棄仁義則為小人

維入富矣

家為无才无矣猶如霜下也

蘇陽の董鼎
孝經大義に
財足を富と云

位ありと書く云ふあり人た多く縁ありて富貴の家み入夫るにして福を得こあり
雖も元来才智あり純物の身なるも忽ち財宝を失ひ原の貧賤の身となる
車盛言ハ冬の甚の霜小あひて枯凋より早しとあり文選潘岳が西征の賦に曰
危冬花待霜晨更尾不
嘒のり白樂天の詩小富
貴来不久倏如瓦溝霜

維去貧強門為有智

人者 死如泥中蓮

皇侃が論語の疏に財をとりて貧といひ位をたて賤と云ふあり此文前章と對する彼貧賤の家より生れ出

と云ふも才智を以て人たるに必す天下の名を發すに譬は泥の中より蓮の花の麗く咲出さるる如しとあり彼遍昭の蓮は濁り染む心して何れ露を玉とあはれむと詠り家の貧しくとも心は清く持たれり四十二章經云

當如蓮 華不為泥汗有 父母如天地 阡若日月 父母の天の地を有る天地の万物を

大義の易曰 乾天也故稱平父坤地也故稱平母父有天道母有地道といへる淮南子精神訓云 以天為父以地為母とも同ト雜室藏經卷の二云 父母之恩重稱如天地師の物を教て人を明かし君の臣を惠く

親族 父母 夫妻 親族は二門一家の事なり是に六親九族の別らあり書言故事六韜盈虛篇云 百姓載其君如日月 親其君如父母

猶如瓦

親族は二門一家の事なり是に六親九族の別らあり書言故事大全の卷親戚の類に親類を敬するに譬する註に段の盧るる草の其白た皮の薄きものなりと有父母師君ふらるる

此の親族は二門一家の事なり是に六親九族の別らあり書言故事物物を生繁る草ふくこと物の多死を指麻竹草の如しと法華經方便品に見えり亦夫婦の如しひの實の汚さるの故瓦の如しと卑下する六度經に

人無戒 者如石 父母孝胡夕 師若住意秋 禮記曲禮云 為人子之禮冬溫而夏清春定而

晨省し是の冬の父母の床を温めて寐せ夏の床を涼して歇せ夕暮あつ物定は晨の早く起て省るる是を朝夕の孝と云亦師と君とに能仕は物を教する師の恩は甚高し老子に 善人の不善人の師なりと周子通書に 師道立則

善人多と然らば善師は仕るに要する亦主君なり 文子子小 交友勿諍事 房玄齡が君に仕る事を問ひ時子曰 無私と曰へり

主君賢は臣

友と云ふは争ひのゆゑにせよと云ふ論語曰君子
無所争と亦中阿含經曰佛告比丘若
以諍止諍至竟不見止唯能忍止諍

兄色書教

已返老願

巴の兄の人と云ふ礼を尽し敬を以て巴の弟の若くはのひを
と加へたるを願ふ事と云ふ字彙に憐
じらう願ふ思念也と云ふ巴の弟の人と云ふ願ふ事あり

人何事智長不異於老
敬といへり

智恵を長く人へ木や
石小同と云ふと
云事也白樂天が

人非木石皆有情
進仙窟曰心非木
石豈忘深恩と云

人何事孝者不異於畜生

歸元直指云人として親の恩を報せざるは禽畜も不如半の能ひさぬ
て乳の鳥はよく反哺と雜宝藏經云雪山の鸚鵡の穂を拾ひて
首ふる父母供養と云ふの故小盆經の踊るも慈鳥鸚鵡尚解思恩

と有バ不孝の人の畜生も劣るなり
善導和尚の觀經の序文義曰不
行思孝者即与畜生無異也

不交二學友何從

七覺林

三學と戒學定學慧學あり戒ハ戒律とて身口意の
惡業と云ふ死定ハ禪定とて散漫と云ふ神と慧
一惠ハ智恵と云ふ煩悩と云ふ本性を現と事あり斷

名義集小あり七覺ハ法界次第有一の釋法覺分智恵とて諸法
と觀ト真偽と撰ハ二の精心覺分無益の苦行とせず唯一とら道法
と修ト三の喜覺分眞のこのりと喜ハ四の除覺分偽りの法をほらひ
除ハ善根と增長に五の捨覺分死見念着の塊を捨るハ六の定覺
分禪定と云ふ煩悩妄想を生せ七の念覺分道法を修と云ふ
心動セバ能觀念と云ふ七ツの覺を七覺分といふ林といふ物の多死死といふ
人林書林と云ふ悟る也
然ハ初ハ三の學を云ふ
七の覺ハ死ぬと云事也

不孝等如維渡八若

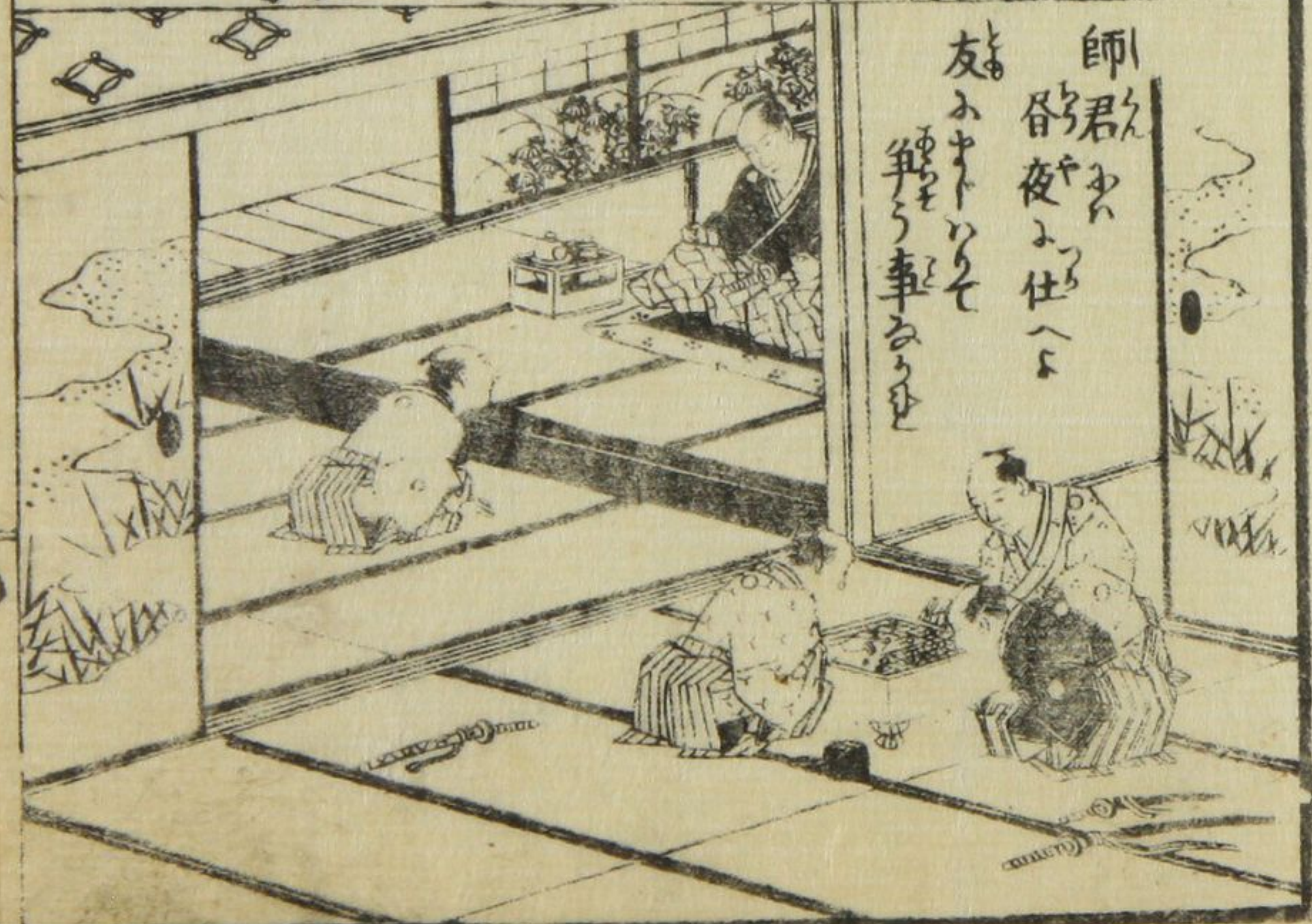
海

四等の楞伽經あり一の字等として佛の脚名二の語等として佛の脚語三の身等として佛の脚身法性色身として相好あり四の法等として脚法あり此四皆等死の多の四等と云る亦慈悲喜捨の四つとも四等と云る是の四二章經華嚴經ホ三大部の補註を委し八苦の涅槃經あり一の生苦二の老苦三の病苦四の死苦五の愛別離苦六の怨憎會苦七の求不得苦八の五陰盛苦あり生と死の時苦と老の年老の苦と病の時苦と死の時苦と愛別離苦といふ人少り苦と怨憎會はらるる憎と合の苦と求不得苦は思ひの手あはるる苦と五陰盛苦は色受想行識の身へさるる苦の集る事なり五王經ハ憂悲苦とせて五陰盛苦と除けり然ハ佛の脚名佛の脚身佛の脚語佛の脚法の助の松葉をばハハの苦の海に渡りてとる船と海に譬ふ

悪人な程

正道ハ法界次第にあり一の正見とて正く物を見たり二の正思惟とて正く物と思惟するなり三の正語とて正く語たり四の正業とて正く業を勤め五の正命とて正く命をたらし

八正道維廣十





六小正精也とて正しく心を精し七小正念とて正しく佛を念し八小正定とて正しく物を
 思ひ定る事多し大品經み見たり十悪ハ一ハ殺生とて物の命をとる事二ハ偷盜
 とて盗とる事三ハ邪淫とて我の外の女とつら事とする事四ハ妄語とて偽り
 と云事五ハ兩舌とて昨日右と云事と今日左りと云曲る事六ハ惡口とて人と詩
 事七ハ綺語とて言語と飾り飾る事八ハ貪欲とて物と貪る事九ハ瞋恚
 とて怒り腹をうる事十ハ小見とて物荒はく邪ととると云是十悪なり四十一草經
 の説精く八末真宗皇帝の脚註み見たり然ハ十悪
 の心あるハ初のハ正の正道へ行事するに及ぶの教あり
 亦女人の十悪の事ハ歸元直指集の中み見えたり

投逸事不遊

兒悪人と云る無為の都実ハ
 天上事あり放逸の悪人とも
 天小生を得て遊ぶ事あるべ

魚為とて梵語ハ涅槃なり華嚴經の疏ハ為は作る
 作ハ則生滅なりと有然ハ無為ハ為事無して只
 樂と遊ぶ都し譬て云る放逸の輩ハ善事ある

敬老必母毛初學子

弟 他人の年若くを見れば我親の如く敬ひ他人の幼く見れば我子の如く愛む孟子曰く吾老以及人老幼吾幼以及人幼同意也 我敬他

念若他人之敬家 他人の心を敬ふは己の心を敬ふに似たり 我と敬ひ丁寧に云ふは方より夫礼の言は先方より無礼に答るるより同く

人々を愛するは人常の是を愛し人々を敬ふは人常の之を敬ふ 孟子の意ありき 家語賢君篇人々を愛せば則人々を敬ふ 人々を敬ふは則人々を愛す 又同く

己敬人之親人亦敬己親 他人の親を大事にすれば己の親も又我親を大事にす 節はして之を物より敬ふ

孝經の敬其父則子説敬其母則婦説敬其君則臣説敬一人而千萬人説所敬者寡而説者衆此之謂要道也 范子の孟子の註曰く知此則愛敬人親人亦愛敬其親と有

欲達己身者先令達他人 我身上達して立身せんと思ふは先他人の上を能く

達するは自ら仁心見ゆて人々を己と達するなり 論語曰く仁者己欲立而立人己欲達而達人とあり家語にも此心の語あり 身他人之愁

即自共可患 因他人之患則自共 他人の患を己の患と爲すは則ち自共の患と爲す

可悦 礼の曲礼に隣に喪ありて己の春を以て相見ると郷に殯ありて己の巷に歌をばすと云り都て他人の愁を看て共患する人同の道ありふ當世の人の然らざる人の愁を看て悦び人の喜

と看ての憎むとむの抑何ホの僻事をややむも人の悦と看ての共み喜び愁と看ての共患を免るる太上 感應篇に云見人之得如己之得見人之失如己之失 見善者

速朽 刀惡之忽忽

何ぞ早く朽るは善根の思ふ早速なるが宜し是の思ふ早くと思ふ忽忽なるは速の

不善と見てハ湯と探が如く是の

修善者有蒙福

修心者惡者指禍 宛如身

隨新

六度經卷の五 建仁寺大藏 釋家 畢罪經云 施善福進為 惡禍 猶音之應 影之連形 此心善則善事と 修行ハ福の来る事 譬ハ山中にて手と鳴せ其音谷心小

來る事 我身ハ我影の如く 離れざるが如く

雄富易志貧 後貴易

後貴易

控財

家富栄る時ハ困窮せしむるの事と忘ぬが能く亦身分貴くする 時財を控へて 扱ひぬがよれり 明心室鑑云 太公の曰 勿以貴已而賤人 勿以自大而他小 易曰 君子

安而不忘危 存而不 忘亡 治而不忘乱 是 以身安而國家可保

或富或貧 或先貴後

賤

世の中の有為轉變は定むるのあて奈何はる 身上に金持でも不才なる 粗語より 身上衰へ貧くる事ハ有又如何 高貴紳縉の脚方ハ有 不時の横災ハ免りて 落魄とも有るは 左右富貴のと死 誇倭

ぬらに心懸て 賤死者を 懼む情と 加へた事と 文選 劉孝標云 廣 絶交論云 日夫寒暑 遞進 盛衰相襲 或前榮而後悴 或始富而終 貧或初存而未亡 李善注云 說苑 雍門周對孟嘗君曰 臣之能

而後賤 故富 而今貧 故

夫難得易忘 存易忘 浮才

又易の学難忘 書をすむはば

音色に物ふぬ 附て眼の重なるの 大の何呉教まて

悉く其の難 其上此一捨おけが忽忘をて 調合のめりる 浮才といは浮気なるの 才覚中実のるは藝なる 亦のの書事 初三時 手習房へ行て 学易くて 然も 万般の用と違 日毎用る 故不忘る 事や 博覧と 博覧と 賞する 詞なる

俱る食有法 亦身身命

食事するに有を以て 身命を獲る 其食 唯ふ食せらる 物非

と皆士農工商の職を勤るが故に食する是と法有と云る 亦身一ツ生を得て在るを命長らん事を思ふる 其命有んと欲する 食するに協は其食を足せんが彼法を違はべからむ

猶不忘

農業必業及学文

農業は田を耕し 五穀と殖る事なり 武士は櫛片に農業をせ 物る 假令耕して身なることも

其時を得ては田舎の農業の勞を思ひやうが事なり 斯云ても学文多し人の事に 委しやうざる 故必に学文と廢事なるを教ふる 往古の人の耕作に事から学文を勤る人 幾個もあり 藝を怕して爰に思ふに 護法論は古の地藏禪師 斷

際禪師と常に田を耕し 茶を種て 空く 過給はし 事を無及 居士も 賞置 せり 彼玄賓僧賀の 葦夜の山田を守りて 鹿を追ふら 手に 經卷を放さる 然バ僧賀と山田守僧都といふ 天台の六祖大師は 米を踏むら 学文をせられり

故未代学者 先可業此書 具学文

易 終身勿忘矣

未世の人を学文と爲し 思ひ先此書 早く讀覺えて 夫より種々の書ふ入 是を学文の始ふ 最要の書なり 必

終身 論之 二十六 觀經 曰 佛告 阿難 此經 至 汝當 受持 無令 忘失 是亦 文の 依て 止り あり

實 讀 教 終

童子之教

是の童子を教ると以童子教と号する童子の字廣韻の童子の獨るなり然ハ童子の室家ふあらざる者なり説文ふ未冠せざる者の名也漢土ふて八年廿歳ある

物あり三大部の補註七巻童子とい應律師の曰七八歳以上乃至未娶なる者の徳名ありと釈名ふ十五歳を童と云るり假令娶年女といと由字文の上ふ知れん心也

夫居貴之新 既落之得立

夫とハ貴人の位の人を云高位の御方の御前出時

貴人とい位の人を云高位の御方の御前出時

慢ハ禮なく立居るとハ甚敬をせり遠巡して御前を退くハ礼なく顯露といふなり云義なり

有る事象象 兩手當胸向 懐ふ顔

た右不問者答 有仰者謹因

親口をより目

上の人ハ道路をて遇し時ハ必膝の下をて兩手を下じ俯伏礼をて過とあり亦其脚方より叫止ぬ事あり敬ひて叮嚀ふ養ふハ兩の手を抱ふ當て向愼んで左方右方を顧ぬやうに云何ふらば仰らる事ハ謹で因ぐらば亦此方へ向ぬ事と指のて答するハ無礼あり禮記曲禮ハ曰遭先生於道趨正立拱手先生与之言則對不与之言則趨而退とあり是ハ先生と云ハ父兄などの事と手を拱くとい手と合する事あり礼記の註ふ委同書ハ曰見父之執不謂之進不取進

三寶及之三禮

神明改拜

三寶とい佛法僧の三といハ聖徳太子の憲法ハ曰萬敬三寶三寶者佛法僧也といハ佛法僧の三寶の字と附る謂ハ室性論云と云々記と云と

繁と怕きて爰あみ畧りと云い説ひ寶いらんと云い文字なり然ば佛の寶の法も
 寶の僧も寶の力も三三宝と云いなりと云い説ひ梵語と知ぬ解くるも然し
 凡俗は是は隨ひて置ぐは三三寶の事釋氏要覽三藏法教等に奉ます三三礼とハ
 三三度拜礼と云い釈氏要覽中卷今釋氏以三三拜首蓋表三三業歸敬也
 身口意の三三業とも三三寶の歸依奉ます云い心を三三拜とるる智度論の
 佛法の心が本なり身と口と末と為か故に三三拜とるる禮の教とるるなり次に
 神明と一切の神々を以て申す神ハ正直總明るる故に神明と云いるる天照太神
 と神明と申すは處つるる常をも神明と總ての神々と云い事と再拜と再度拜礼
 とも云い神ハ陰陽不側人ハ陰陽の氣を受て生る者の陰陽ニツと像りて再拜
 此の拍手と云いて手を拍て 二ニツ鳴とも同理なり佛説
 小再拜の説と云いも取べるる
 人ハ再拜と畧して一拜とるる君と
 師匠と常人より一段崇めてりる墓時刻怯道社
 頭の上み頂て戴く如く甘んの夏こ
人間成禮師君の以戴
墓時刻怯道社

時刻下
 墓と古人を葬する塚の往古名あり人の墓の前と通る
 時ハ必ず慎んで過る社と神を祀る死る假令陰祠
 小社の類も音馬と音打と下て通るべしと
 の教あり禮記檀弓下篇云い子路曰く
 吾國之也過墓則或過社則下陳師道思直守記云視廟社則思敬
向堂塔之新不

可行不淨
向聖教之上不可致也
 佛圖堂塔の前み向ひて大小便ハ勿論酒肉五辛を食し女姪もど犯す
 不淨の事を行ふべしと聖德太子の明眼論ハ甚と戒め給へり空一
 一谷禪師の正理編中の塔ハ登りて女姪を犯す雷ハ討て死する者を
 の堂ハ常の仏殿り塔ハ一切經音義二七今世の塔ハ則ち宰塔婆あり天空あて宰塔婆と塔との昔昔洪字菟と切韻塔とハ
 仏の堂あり塔廟ありと戒檀圖經ハ塔の字漢土ハ昔より有字るるハ天一

禮
 佛圖堂塔の前み向ひて大小便ハ勿論酒肉五辛を食し女姪もど犯す
 不淨の事を行ふべしと聖德太子の明眼論ハ甚と戒め給へり空一
 一谷禪師の正理編中の塔ハ登りて女姪を犯す雷ハ討て死する者を
 の堂ハ常の仏殿り塔ハ一切經音義二七今世の塔ハ則ち宰塔婆あり天空あて宰塔婆と塔との昔昔洪字菟と切韻塔とハ
 仏の堂あり塔廟ありと戒檀圖經ハ塔の字漢土ハ昔より有字るるハ天一

聖の号にやう然とも佛の骨を埋て墓と天竺にて塔婆と云ふ所の亦聖教の
 委く説く十か六借けをとも先徳て佛の教を聖教といふ所の亦中華の
 聖人孔子老子等の書をも聖教といふ所の何れも尊た教の書をもバの
 上に向ひて無礼を行ふべからざる僧尼白衣とも経律論と説と行
 語とてむことしる事と云翻巻とて其本とて扇つらふる戯れに
 人の未世の鹿猪狗と云生るる云事阿難請戒律論に見たり

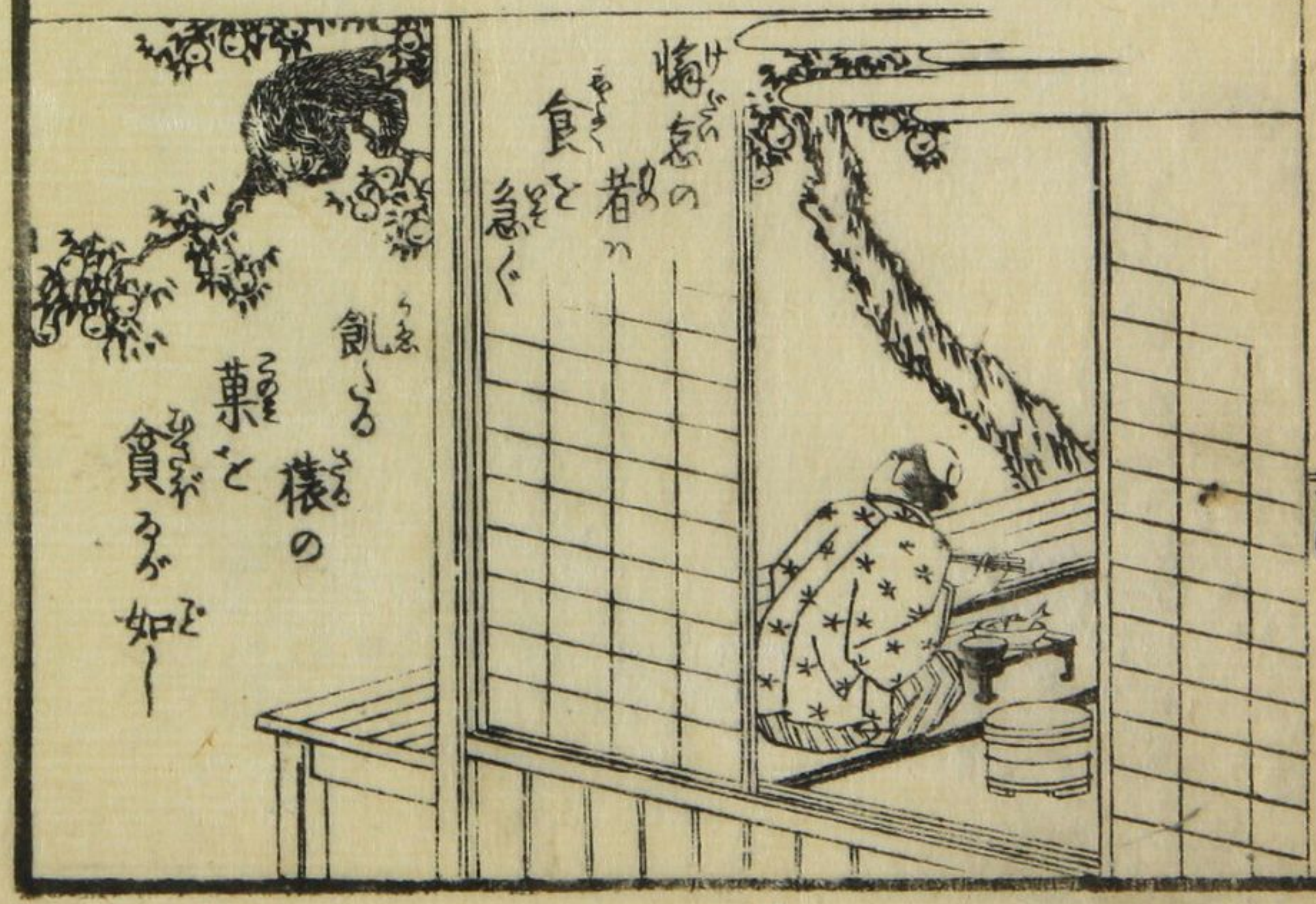
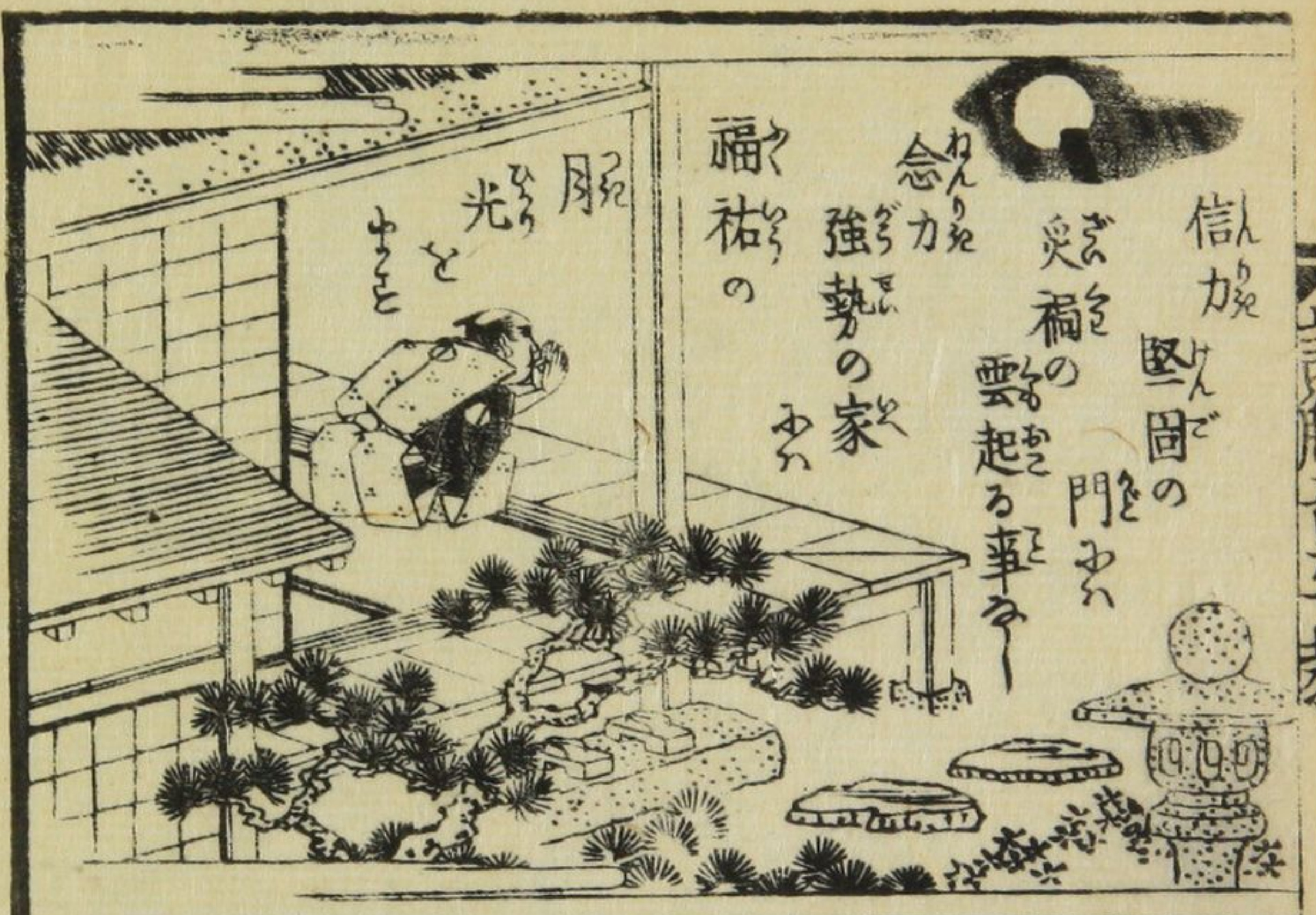
人倫必る禮 朝廷必有法人向せ
 人倫と云天下の万民をいふ此万民
 小皆礼をてハ協かべらる其礼の
 云々のハ朝廷より出る朝廷と云

日本紀みこかき、読り禁中の事あり礼義作法皆禁中より定め命令出さる
 國法あり是を朝廷と云法有といへり聖徳太子憲法十七条の第四曰
 群卿百僚ハ礼を以て本と云夫民と治るの本必禮あり右礼せさるべからざる



主事童子教

よ



下礼無き必き過有君臣礼あり位次乱れ
 百姓礼有バ國家自ら治ると云り然バや人にて國は
 交衆不
 の礼を行はざるは衆中自ら外過ら有べとの教へ

雜云 車畢と速函 觸事不透明

之皆不ひ雜
 交衆とい事ありて人の大勢會りたる處を云ふ雜言と
 いたぐと益も立ぬ物語とする良をいふ益るは雜言と
 する中より不トして事を出して口論を致すのめ

備又其用事終バ早速ハ皎り澄ダは人より跡ハ殊りて長居するハ善うら
 ぬ事あり觸事とい何事ぞ有し時とい良あり明ハ遠ざかると明ハ明友の事
 明と相談せし良を遠ぬやらの事ぞ言語とい言ひ事なる離る良を得
 ざらば明といの云夏と餘り粗詰る良をいふ善うらげとの教ある明の字周礼
 の註み曰師を同するを明といひ志を同するを友といふ周礼の疏み曰明ハ
 疎してまぐ友ハ親して少ハ公羊傳ハ門を同するを明と云志を同するを友と云

語多者不才老朽如味友

餘り小語あり云々
是を品女と云々

世向ふ道徳の誦なり云て實の無人いとも有者あり
大の味を因て何の記も知ふ浪み吹ると同じ事
顔面の篇み孔子曰く君子行を以言
小人吉を以言と離騷經云人不可以
多言言為善大言以善味為良
悔意を食意を疲

猿の食菓

悔意を食意を疲
急ぐりのる壁に疲る猿の菓を争ひ喰ふ如く
悔意を食意を疲

出曜經云譬
如飢猴獲棗見熟
甘菓投身肩荷棘

勇者必者危

夏虫如入

火

勇者との血氣盛んはて人負る事と嫌ひ進んで退く者
火の明を見て飛入て死多如山谷を詩小飛蛾赴燭耳死禍

純者

亦多る春を如遊林

思はて純のの林で過ら
生匪安穩あるもの
壁言は春の鳥の甚し鳴林の

向小戲を遊ぶ如く
文選崔子玉壁右銘
小守愚聖処減あり

人身者有壁

密而勿終

言

誰も閑人のいと思て慢りみ人と諍り諍言
世の事ぞいゆる壁み耳が付て居て忽知る物なり
詩鍾小并篇小君子無易由言耳屬干垣

人眼者懸

天 隱而の犯用

誰も見て居ぬる官と思ひて惡事をなす
忽ら天の咎を受て頭を竟み罪科み行る
るるり天帝毎日見通る是と人の眼は天

小懸る云云必き隠ても知るる後漢書小揚震東萊郡小
赴時王密云者賄賂を贈る楊震曰天知神知我知子知
此四の知者ゆゑに受くんと返けり是を揚震四知と蒙未云り
車必云

寸糖遊行千里路
人必守舌破

損立身
車僅小三寸の糖を力めて千里の遠死土地を往未する
あり夫引替人の僅小三寸の舌を動して不要の事と云出
思ぬ發動を致し終ま我五尺の脚を損小事を戒む

是此三寸の舌五尺の身を破事と云ん欲て車の事を前ふ述り論語
為政の篇孔子曰人而無信不知其可大車無輗小車無軌具何以行之
哉又詩經瞻仰篇婦有長舌維厲之階云云鶴林王露聽誤の
詩み堂々八尺軀莫聽三寸舌
史記卷二十五張良世家小曰
今以三寸舌為帝者帥と有
只是禍所
舌是禍

之根
報思経曰一切衆生禍從口生口舌者鑿身之斧也家語
金人の銘小曰誠能慎福之根口是何傷福之門也と總て
口を利過して福を引出し事世向いらも有る禍は口より出病を

使口如鼻矣
終身敢言事
遺誠の
行其基が

口如鼻
死後無咎是口を鼻とやと思ふその云ど
る言一出

者
細追返者
祖庚事苑小鄭玄が言を引て曰過言一
出駟馬追之不及と有り過言といふ過

大名なるの東車と馬四足を曳とる是を駟馬といふ人などを追蒐るは
馬四足を曳追うけるは立地追及べし舌頭より云云云言ハ彼駟馬も
追及むぬる事なり劉子小曰一言之失駟馬不追不可不慎といへり

言解童子教

白圭玷之磨 惡言玷難磨

詩經白圭の
詩と云あり白
圭と云白珠を

得る事も有べし人の言出 惡言の疵 磨ても治り難 王の啓言し
教る詩經大雅抑之篇曰白圭玷尚可磨 斯言玷不可為

猶福者無門 唯人在新招

福のこころは福の
さいころひるる借此
福の未るふ

別小門の無る人々の心より招く 惡へ来るる
太上感應篇おもひ左傳襄公二十三年傳
子閔子馬が曰く禍福無門唯人所召也

天作不可避

自作災難逃

書經太甲曰天作孽猶可違自作
孽不可違とあり天の作る災火と大風雨
震動雷火旱魃疫癘の類るる其天災

ハ道々事も有べしども自ら
作し惡事の災ハ公廩より救へ
給はざるゆゑ一向ハ道々してくる

夫積善之家 必有

餘慶矣 又好惡之處 必有餘殃

矣

易の文言曰積善之家必有餘慶 積不善之家必有餘
殃といふ積善といふ善事を多くて人を救ひ物の命を助る人の家を
云餘慶ありといふ慶良多く有といふ事を好惡の處といふ惡い事を好

ひ人の家といふ餘殃有といふ殃ハ殃るる殃ひ多く
来る事といふ然る惡い事をせざる隨分心懸
て善事を施し人を救ふやうに做したる物あり

人而有陰徳

必乃陽報矣 人而有陰行 必乃照

注昇高

下

名矣

陰徳といふ人不知さぬやうに善事を施し事といふ陽報といふ目に見えて好事の来るといふやう然る人知し善事をして置ば明く仕合のよき事ガ成るやう亦陰行といふ人知し学文を

勤め身の行ひ正しくして隱居といふ照名といふ名の天下みかやく事をし学文を行ひ正しくして山林に隱居して居ても竟て天下み名の顯るゝと云事ぞ淮南子十八人間訓に曰山致其高而雲起焉水致其深而蛟龍生焉君子致其道而福祿歸焉夫有陰徳者必有陽報 信力堅固門矣禍

雲垂起 念力強盛家 福祿月増光

轉行記云不為諸疑所動故名信力能破諸邪想是為念力と信力といふ信の心なる外その惡死事に心を動さず信心堅固堅く身を守りし時の諸の災ハ護ぬ物なり災を雲小塵しり念力といふ神佛を念し所る事

心不同如面 譬如水随爰

千方の人と集ても同無のり人の心も其

といふ其念ざる事強く盛るといふ福祿といふ福の祿未りて三日たると云字なり然を神佛と念ぶる力強盛する家ハ福の祿未りて三日の頃より毎夜月の光の増やうに段々と榮あべし是ハ月小譬ての教るなり 如く百人が百人ながら違やと知べし左傳襄公三十年の傳小鄭子産鄭子皮小答て曰人心の不同事其面の如く吾豈敢て子ガ面を吾面の如くまると謂やといへり亦水の蒸小随ガ如く水ハ和する物の表方なる蒸小入をハ方ふる圓蒸小入を丸くするなり人の心も其如く惡人小交をバ惡心ハこり善人小交をバ善心ふる物なり後漢書卷の十一小曰君ハ杆の如く民ハ水の如く杆がるとは水も方る杆圓とは水も圓といへり杆ハこりの事なり 不挽他人弓 不誘他人馬 明心宝鑑小太公の曰他弓を挽くと好むと七奴と他馬の

車を愛るを八賤と云ふ斯の如く賤めり唯弓馬の限べくぞ何れよらば他人の物の借用ぬあそめられ

前車之目録後後

車之為戒 希車之不忘 得車之為

師

是ハ漢書及晏子春秋にも見え該る前車後後車戒とあり前へ行車が路上の大石をふ當て覆へと後ら行車是を見て其大石ふ當ぬやうに氣を附て行ゆ多無難る是ハ車に譬言

善之為 善之為 善之為 善之為

名流 究極の獨多

善行は有し人未代や其名流をて聞るる亦君子電愛

却て禍みる物なり然を電極つて禍ミと成りて備の弥子瑕が

君の電をせりる小誇りて君の脚車に栗栗の餘りを君に進せりと

と太甚外るりとして誅せらるる唐の楊貴妃の女示白皇帝小電電又

越王句踐小籠せらるる後小身退れも禍を避ん為

留皮人者死箇名

留名豹死留皮といへり虎の皮ハ美物なる故死て後世の重宝と

是を以皮を留と云る人ハ死て其名

治國之賢皇勿

侮縗寡矣

孟子小若而無妻曰縗老而無夫曰寡とあり縗ハやもを云て男の袂身なる寡ハやゆめと訓て女の獨身なる然を國土を治たさる賢皇聖君もこの

饑寒孤獨の輩を憐れ給ふ事なりと
との教なり古文孝經孝治章曰治國
者不敢侮於鰥寡而況於士民乎

君子不參人則

民作怨心矣

君子ハ道ある王者の事なり人として下万民を以て
民百姓小善事あらば疾く褒美と之を若夫を
捨めて怨むるを怨むるは万民の怨むる怨むるを

入境而問禁入國而問俗

禮記曲礼入竟而
問禁入國而問俗

其境に入ると其處の禁制の法を人に向て何れの國をも
方般の制禁の法有る能夫を用ふる時ハ過右に亦外國の
入ると俗を問へ俗とハ風俗の事なり是又初同ト云ひ

入郷而

隨俗入俗而隨俗入俗先問諱為

教主人也

郷に入ると云ふ事其郷に入るとハ其人の事なり
教主人也云ふ事其郷に入るとハ其人の事なり

皆為敬主人也とあり人の門に入るとハ
早く主人の諱を問て姓を告ぐ禮なり

君而私諱無

二尊号也

曲礼云君所無私諱大夫所無公諱と私の諱と
ハ我名多し我親兄弟の名多し若君の諱名と同更なる
私我方の名を叫ぶるは私事也君の諱名ハ無二の尊

二日國無二君一家無二尊

思夫憂遠慮必可

有々憂

識語曰人無遠慮必有近憂愚者
といふ事人無遠慮必有近憂愚者
といふ事人無遠慮必有近憂愚者

如用

後嗣天竺維指地

愚る心で物を愚るは我愚知やと外悟ぬるは維と以て地を指す
其維やどの死ぐあはる愚鈍者事を作ら鈍る事より外は
出来ず莊子曰用管窺天用錐指地也亦小平

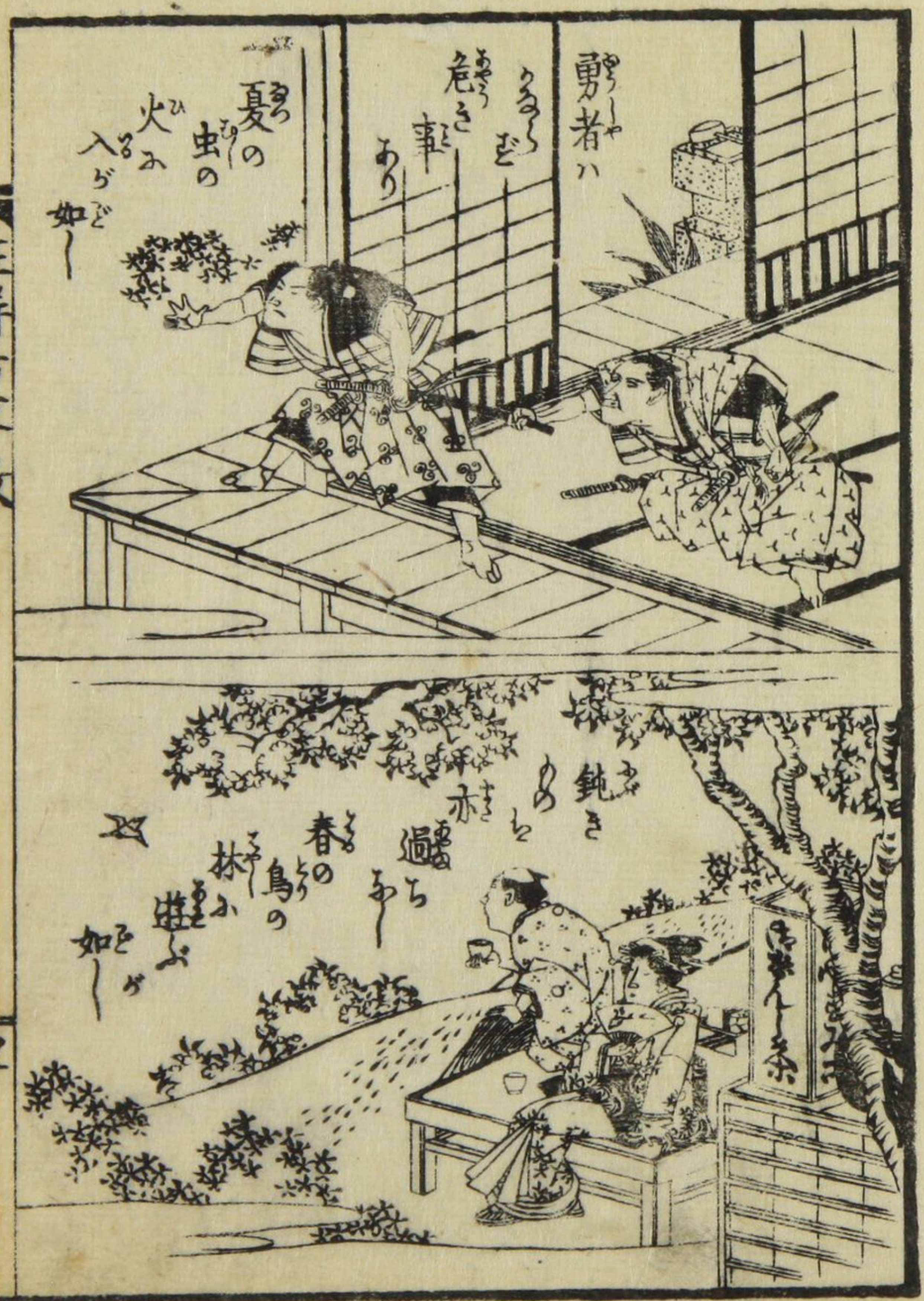
神明

罰多人非教の念懲

て死る若あり是は神以者を悪んで殺し給ふ
ふあは外の若を見せして懲め千萬人を善人せし
と為たやめが故多う今公願の法令耶のこと

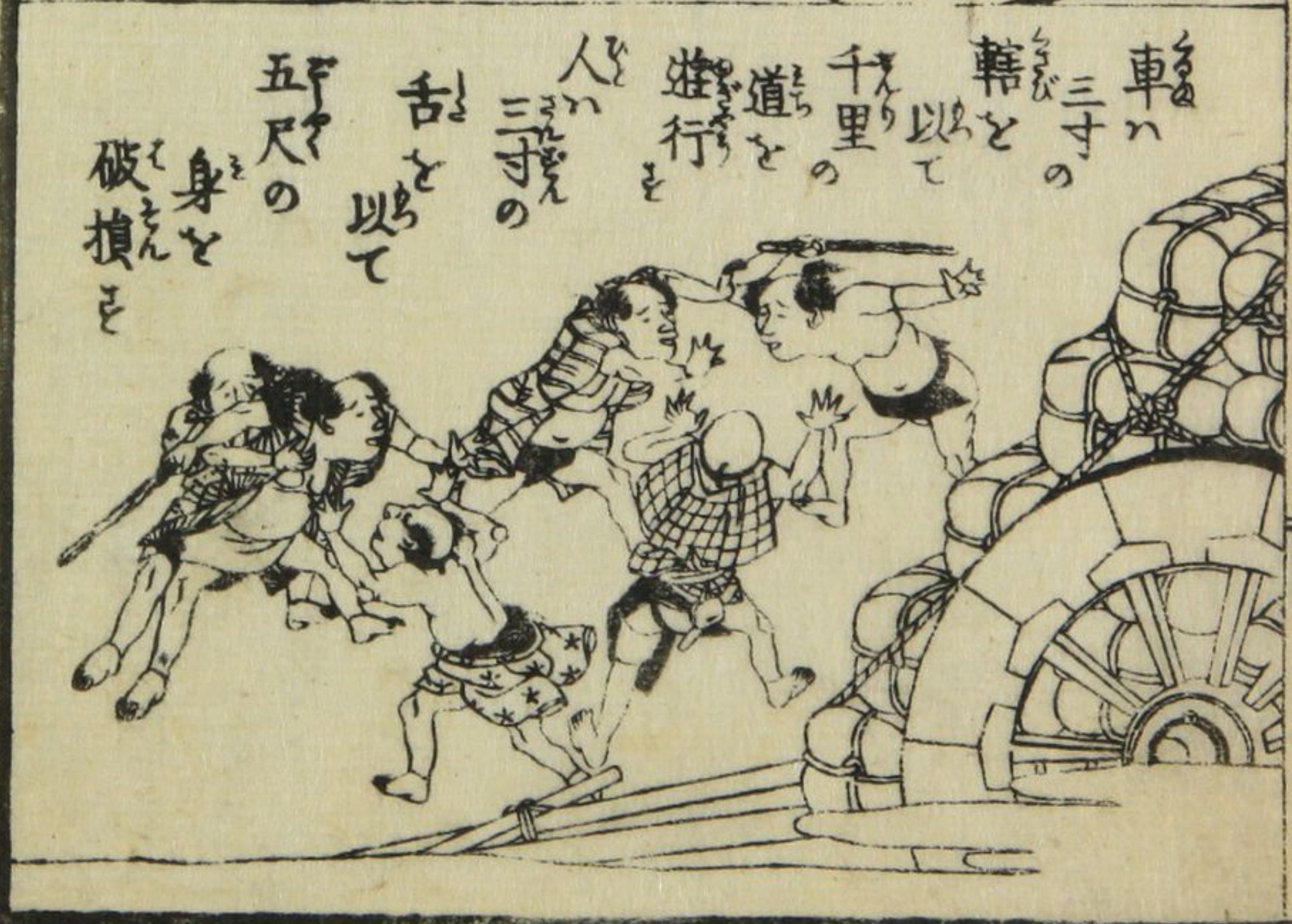
師匠打弟子

弟子との事ハ我弟子とも思ひて万般の事
と教る故ふ弟子とも多う然ハ其師匠弟子と
打責るハ愚として做ふ非ど能せんとの事



夏火の虫の入り如
勇者の
危事
如

鈍き
過る
春の鳥の
如



生而貴者習終未智徳

生而貴者 習終未智徳
 聖人の外ハ生也
 然ルテ貴也者ハ
 生たらず母の胎内よ

貴者必

不富 富者未必貴

不富 富者未必貴
 白氏文集ハ高者未必貴
 下者未必愚とあり智徳あり
 て貴人ハ多分貧乏者あり

惟富心多欲 是名爲

貧人 惟貧心多欲 是名爲富人

金銀多々家富りても遣ふべし時つらき欲多者ハ貧人と同ト事あり
守鐵奴のひて鉄金の番とさる奴僕あり家ハ貧ト雖も足事と知者の
是富人あり雀子王が座右銘ハ知足勝不祥遣教經云汝等
比丘若欲脫諸苦惱當翻
知足乃至不知足者雖富而貧知足之人雖貧而富
師不訓弟子是為

破戒 師して弟子を教訓せらるハ
善戒を破りて師の心あり
釈氏要覽上卷のつひなり
師所責弟子是

名爲持戒 呵責といひ責る事あり教ハ隨ハざる弟子ハ呵り責
て能教ハ是と師の持戒といひ持戒といひ戒と持事あり
涅槃經三の卷ハ弟子の破戒を見て呵責せむとバ

我弟子ハ非
とて佛ハ日
ハ置きてり
當の弟子去師弟墮地獄

善弟子去師弟至佛果 惡ハ弟子といハ
戒を破る弟子
る善弟子といハ

何ハ十を教と背ざると云其惡ハ弟子と教訓もせむ其修善ハ時ハ竟ハ
福非ありて師弟ともハ地獄ハ墮る程の事有べ亦善弟子を得て愈よく教
ハ置とてハ師弟ともハ名と顯諸俱ハ佛果ハ至る言有べ菩薩善戒

經ハ曰為師不能
教訓弟子則破
佛法當墮地獄
不須教弟子早可歸父

母不和者擬寬成怨敵如害 如何バハ教
ても須ハざる
弟子ハ早く

親の許へ親ハ
強一正ハハ
と成て仇とる
當ハ事也
順惡人必遭 縁

大如廻柱 剏善人不離 大如如浮

海 惡人しわんごらちて懸どふ居るハ世間せはく竟其の禍来らるり

我身の災害しるる事あり佛本行集經十六日愚痴之人被其

隨心善友支 如麻中蓬生 親近

要友者如藪中荆曲 善友も隨ひ居る麻の中

親近 親も自ら非のり藪とハ澤の事ど竹の事ハあらま 離親付

疎師 習戒定惠業 根性離愚純

好自修學位 親ハ親類の家を離れ他人を師として戒

一日習田一字 心一定と我心を清くする(浮世の汚を離れ本

注釋童子教

三百六十字 一字當千金 一錢助

多生 一日一字づ習ひ覺ても一年中の三百六十字を覺るるなり
然る出情して學ぶべし事ぞ其字の用を為事一字が千金
一も尚るやらるる物なる史記列傳二十五呂不韋が傳ふ此人呂氏

春秋の書を作て咸陽の市ふみえて若一字も悪れ鬼を更治ら
ん人あり銭を贈りて謝るべしと記あるなり是一字千金の故事なり亦一
多生を助るる文字の点一ツ覺ても多生の助となるなり元亨釋書は法華
經の一字を書かぬ此の点をさら亦一觀の
水を取り僅の善根をもども地獄を脱せ
て人間に歸し事法華靈驗傳にもあり
一日師不疎況

教年師乎 師友三世契 親者一世

取 假令唯一日物を學ぶる師匠でも疎ふと云く況て教年の師をや
いよく大難ふと云ふ事なり師の三世の契とは是は出家の身ふたり
の語なり出家の師の恩を父母よりも重しとは在家の人の父母の

恩を師よりも重しとははる事大般若經の趣なり親子は此世で
一世限めて来世まで再逢するは師の三世の契ありて来世も又
其次の世も寄會や縁深しと云ふ取との親と云ふ事なり
弟子

去七天 師影不可踏

高柴と云ふ孔子の弟子ふりて足不履
影といふ諸注要集第三小善見論に
云弟子從師行不得以足踏師影
觀音菩薩の師の恩を忘るる為ふして
冠の中師の佛體を納て常々頭上ふ
頂に居る師の本師阿彌陀如來

寶冠冠戴蓮陀

親無量壽佛經親無量壽佛經 世音菩薩 毗楞伽 佛室以 為天冠 冠中有立化佛

勢至為親孝頂戴

父母骨

勢至菩薩の父母の孝行の為に頂戴父母の舍利を戴き給ふ肉髻の上の一箇の宝瓶として宝瓶の中有此中父母の骨を納て常に是を頂戴するに肉髻の鋒頭

摩訶華 花の如く

宝瓶納骨

朝早く起て手水をつゝの意を能て神佛を念して経巻を誦誦とて毎朝かくの如く為す

根意涌経巻 夕運経酒足 静性

案義理

朝早く起て手水をつゝの意を能て神佛を念して経巻を誦誦とて毎朝かくの如く為す

とも爰めて夜の事なるなり夜の業を勤め

習讀ふ入意

如醉味韻語

讀千卷不復

盡財如

臨所

如何に習ひ誦たりて能意ふ入るに醉酔て空言を誦ひ語るやる物なる千方巻の書を誦たりて能く度も復せざる大

小市町へ行やる物を買ふ代物の澤山をも我物とする

薄衣冬夜 忍寒

通夜涌

多食之長日

除飢終日

習 薄衣との着物の薄たとの假令冬の夜寒たふ衣服薄くても寒さ
を忍んで夜すがら書と誦誦と一亦夏の日永ふ食物の乏た事ありと
も飢ひりいのを除けて終日書を学しあり通夜と教たりとの事あり

酔酒心狂乱る食倦学文 詩狂樂 佳味と作
朝の晩 終日 酔酒心狂乱る食倦学文 詩狂樂 佳味と作

如く酒の味た物なせども在水なる酒ふ酔ぬせバ心狂乱ると此事あり總て
酒の許すの科ある事儒道佛たとも戒多う四分律智度論ホも飲酒
犯三十五種失事とのと外典の論語内典の梵網經楞伽經るも甚のゆり

給ふ無量壽経の義疏も飲酒の人の善行を修せど家業を事とせたと
云り左も右も酒の多く飲ぬがよ亦食物を過せ氣重く懶ふるて学
文ハ云ふ及ま何事も不成ふる物なり然バ前の句飢を除きて終日習と有

温身増睡眠 夢早起悔忘
もひの目とて 習と云ふ有ま食 温ぬをふとの教

火燧みどふ入て身温ふる過ると忽ち睡眠いぞ学文も家業も休ふ
るる是を以身温む睡眠せと教ふる睡眠の居わたり眠の常の終ふ
るる凡眠の学を廢し諸道を妨ぐる事甚あり是を以て業報差

別經ハ睡眠ハ十二の科と説經學津心經ハ二十種の過患あり
宰予昏寐と孔子朽木の譬を以是と責那律飯寐と釋尊并
蛤を以是ととるなり 持本論語 持本論語 持本論語

るる景行録ハ曰心不逸 形不可不勞 先祖より農家あり常ハ学文を好む家こ
馬鳴其口薩遺教経論ハ曰懈怠怠者心 匠衡為夜学

匠衡為夜学 史記列傳二十六漢書列傳五十一卷ハの
匠衡字ハ推圭東海郡朐と云惠の人あり

鑿壁招月光 史記列傳二十六漢書列傳五十一卷ハの
匠衡字ハ推圭東海郡朐と云惠の人あり

匠衡字ハ推圭東海郡朐と云惠の人あり 史記列傳二十六漢書列傳五十一卷ハの
匠衡字ハ推圭東海郡朐と云惠の人あり

燈火の光をひたして書を讀する御書許多持する人あり匡衡此人が隨ひ庸として耕作し曾て價をとらば主人怪として其故を問は匡衡が曰く願くは君の書を借て我が讀めば主人其心と感て書を借て價とけり匡衡の學を勵る隱るる學者の如きなり但燈を鑿て隣家の燈火を招きそののこめて月の光の事ハ未考也

孫敬為學文閉

戸不通

晋張方が楚國先賢傳云孫敬字ハ文宝楚郡の人なり學文を好む常ふ書を讀然る外より人來り時ハ學文の妨げらるるを門を閉て人の出入

蘇秦為學文維

を止めて書を讀けり是よりて世人諺名として用た先生と呼けり國王カロもども辭して仕ざりしとぞ

刺股ふ眠

史記卷の九及び戰國策ハ蘇秦ハ維陽軒里の人なり十年學向して家へ歸りける其兄の妻居房小寐て居て起もせど亦接待事もせは我妻も機を

上布織て居ながら其俸下もせど物も云ふ其時蘇秦心中歎き責て此の官禄ふさぐ有つて妻兄よめるも斯くして日夜學文を勤め勵むと夫より再度走り出て鬼谷先生と云人を師として昼夜學文を勤め勵むひり睡氣さばせば錐を股に指て足血を流して眠らば斯の如くして勵むと半年積りて學向成就し竟ハ齊王に仕て丞相の官に上り六國の諸侯も心を同じて蘇秦を隨へば蘇秦も諸侯とらふ印書と授りしをを佩て家へ歸りけむ初め困居て起出ざり兄よめる機より下ざり我妻も遠く六十里出迎へける蘇秦兄よめる謂て日前の年ハ困居在て起出ぬはざり人ガ今六十里出迎へぬハ何事ぞや兄よめる答て曰汝今丞相の官にあり六國諸侯の印を佩て来り名を天下に奉祖父の名まで外園を清く然ハ迎ふ未むりと云蘇秦が曰我丞相の官にあり今ハ全く兄よめるの困居在て起ぬはざり手がら也と云り

後敬

為學文 纏股頭ふ眠

後敬何の書ふあるや未考也但先賢傳ハ孫敬學文を勵む小眠氣おこる時の

瀧と頸懸て屋の梁小繫
死置けり孫敬後故名大やう
相似るり誤りて兩段とせりめり

車胤好夜学

聚螢

為燈矣

晋書車胤字武子南平と云夷の人なり常に学を
勤て倦車を家貧く夜油を得ば夏の夜うすりの
の中へ数十の螢を取入て夫ふてして書を讀り後竟

ふ博字の名世み
隱むるく吏部尚
書の官ふるなり

宣士好数学

積雪為灯

矣

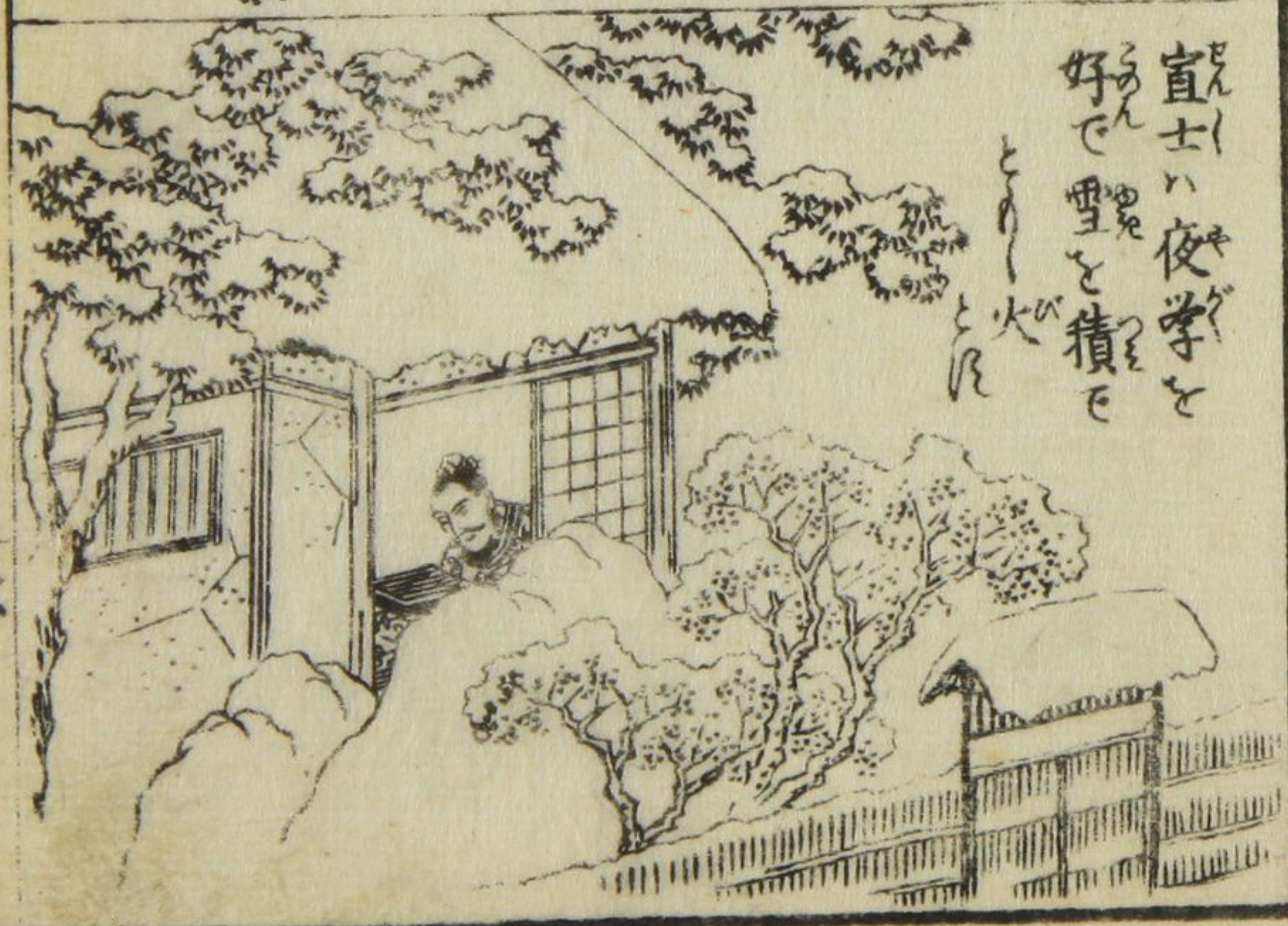
文鑑詞林文人傳九十一載宣士字の演侍會稽日の人なり代々農家
なるも家さひめて貧し宣士夜学文を做んととむとも油ぬり冬より
春すそ雪を轉め積で其わりりて書を讀り後侍中の官ふ上をま

休穰入文意不知冠之落

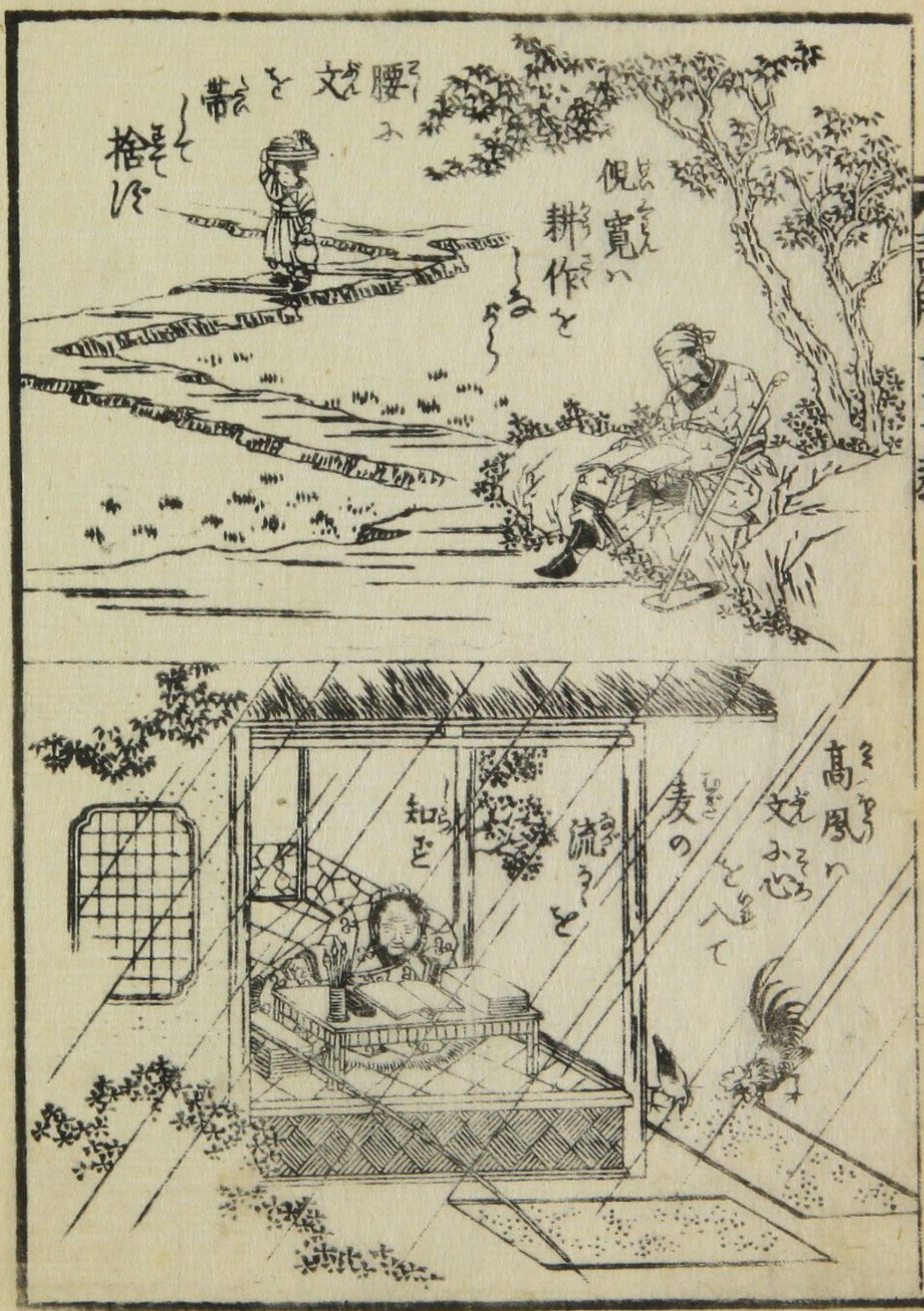
文士傳卷四十三
小休穰字ハ周
和河陽縣の人



車胤ハ夜学を
螢を聚る
燈火とを



宣士ハ夜学を
好で雪を積で



高鳳の文意 不知妻之流

 高鳳字文通南陽郡葉縣人其家農業以
 死作之けり高鳳常小書を好んで讀む一時高鳳が妻妻を干雞の末て
 味やん事と思て高鳳小謂て番をさせらる高鳳手に筆と持雞を追ら
 書を讀て居らる時節急小雨らり出て妻を悉く濡しけり女時ありて
 妻来りて彼妻いと向し時はためて思ひ出しけりと
 るる夫程小思ひ入て学子文を勤しむる後其の学才世
 小聞え竟小名儒の譽を得らる後漢書小出らる

衣口通書小息

 廣輿記卷之五東昌府の人物類
 小晋の劉寔字ハ子真高唐と云
 魁の人なり家貧く牛の衣と賣て

言解童子教

世を渡り常小緻物をせり
口書と誦誦して息と死る博
学やて後竟小司空の官ふ

但實見を耕作 獲

帯文不捨

漢書列傳二十八李氏藏書循良各臣傳ホホの
皆愧の字と見ふ書り愧竟の千粟の人る孔安國
と云る人小仕へて学問けり身貧く常に人小備

を賃とて耕作せり
腰小書と結つけ讀るる小
耕ける大の博覧と云る

此等の人と云 匡衡より愧竟まで十人の人
と云る此人々家の貧死
と厭と昏夜学文を願て具名とせ小顯る者あり
藻の字海草の事やて本朝正月に云物小付る草なり神功

学文 文藻満國家 蓬蓬及項學位

皇太后の馬の飼草小用ひぬ故小神馬草とも云其草美事なる故あり
て文章を書つてねるる小能似る故小文藻と云ふと供此が正韻或は顔
師古が漢書の註ふけり碩学の位と碩大の義なり大の義なり大の義なり

修歴美塞振筒 口恒涌経端 亦削

弓作矢 腰背挿文書

双六の塞と磨と筒
を振起作とする身分

と誦とるり高恩劉是ホホ如くせしとる亦弓を削り
矢とて其外何ホの家業の人でも腕の側へ書物を
おけて常小讀べしとるり休揚愧竟ホホの如くせしとる

張儀誦

新古 枯木結束矣

史記列傳十張儀の魏人なり
鬼谷先生を師として学術
最高張儀元来年若小

て新古今とて古今の書と誦講しけり枯る木も枯る木も枯る木も枯る木も
藁を結ぶ思ふと云り文選魏都賦註小李周翰曰龜老
張儀張祿英雄辨古榮枯在左一朝能濟時厄

龜老

通史記 古書得寶矣

人三校の古を讀むと言を枯る木も枯る木も枯る木も枯る木も
古書も肉づく如く云事空海大師の三教指歸小見えたり同
書小亀毛先生の徳を賞て九經三史心藏小活裏三憤八索意府
小語憶せりとら然ども史記と誦と云事心得たり古の史類記類の
書を誦するや司馬遷の史記めて有べくも假し陸龜蒙
が事う是の唐の世の人をして藏書教万卷とあり然らば史記も誦するべし
遊仙窟小云白骨再完枯樹重花
左傳小遠子馮々云吾見申叔夫子
所謂生死而肉白骨也と見えたり

伯英九歳初軍

列博士位

國朝名世類苑卷四十五小伯英字長花鄰那の
人る年五歳あつて文詩とよく七歳して經史と連
一車として學びと云事也九歳の時元帝お仕へて

博士とあるは博士との
廣く物も通達せし
博覧の人勤る官なり

宋史七十初母學登師

傳

獻徵録三百五十七卷小宋史の先祖より農家あり幼雅とたり老年
小到るやを耕作を業とし世を送らり七十の年初て陳丘といふ人小附
て學文せり夜を日小繼て學びけり竟小大學の譽を得て諸史

百家の書小通ど何時より宣まで位三公小上あり
三公とい大師大傳大保あり故小師傳小登といふり
日本も右大臣左大臣大政大臣是を三公といふ

智者推下

劣登高臺之閣

愚者推高位

深奈梨之底

爰こゝ智者ちやうと云いハ学まな智ちありて戒かい行ぎやう止と心しんの佛ぶつ性じやうを能あた悟とる人の事ことなり又また愚ぐ者しやとの戒かい行ぎやうを破やぶりて放はな逸つる者ものと云いハ涅ね槃ぱん經ぎやうの戒かい行ぎやうを

存ぞんを右みぎ智ちと名なけ存ぞんざるを愚ぐ癡ちと名なく下げ劣りやくと下げ賤せんの事ことなり高かう基きの閣かくとハ天上てんじやうふ多おほくして云いハ智者ちやう者の下げ賤せんの中ちゆうより出でる事ことと云いハ善ぜん戒がいの力ちからて梵ぼん轉てん天てんの裡うちの高かう樓ろう閣かくに登のぼる事ことなり愚ぐ者しやの事ことハ高かう位いの人ひとなり其その破やぶ戒がいの罪つみの重おもり多おほし奈な梨りの底そこに墮おつる事ことハ梵ぼん語ごの末すえ泥でい梨り耶やとあり中華ちゆうかみてハ無む喜き喜き樂らくと云いハ喜きひ樂らくじ更さら無むと云いハ云いハ心こゝろなる祖そ庭てい事こと死し五ご小せう泥でい梨りを唐たうめて寄よ係けい又また用よう城じやうと云いハ

智者

作罪者大不淨地獄 愚者作罪

者小必墮地獄

合あ戰せんの時とき有ある軍ぐん師しの謀ぼう計けいを廻まわす數かず万まんの敵てきを殺ころす或あるハ城じやうを燒や討うちす事ことなり大おほいなる罪つみに似にたりと雖いえも又また更さら小せうの罪つみに墮おつる事ことなり

地獄ぢやくも墮おつる愚ぐ者しやハ此こゝ少せうの欲よく迷まひ僅わずか一個いっごうを殺ころす半はん個ごうハ傷やむ者ものなり女めの盜ぬすみ命いのちを亡なし刑けい小せう行ぎやうす是こゝ愚ぐ者しやの罪つみ小せうゆて地獄ぢやくに墮おつる事ことなり大おほ藏ざう一いつ覽らん小せう日にち愚ぐ者しや小せう愆せん終しゆう大おほ報ほう智ち者しや重じゆう業ぎやう準じゆん償ぢやうなり

者常懷憂僻之獄中囚 智者常

觀乐猶如光音天

止と法ぽう念ねん經ぎやうの偈げ曰いはハ智者ちやう者しや常じゆう懷わい憂う而しか似に獄やく中ちゆう囚い愚ぐ人にん常じゆう觀くわん樂らく猶なほ如ごとく光かう音いん天てんに似にたり此こゝ經ぎやうの文ぶんと

童子どうし教けうと裏うら表へう表ひょうる事ことハ奈な何なになる事ことなり作者さうしや心こゝろありて更さらや亦また書かき書きすの事ことなり智ち者しやの我われ決けつり罪つみを思おもひ佛ぶつに慙ぜん愧けい天てんを忍しのぶ心こゝろ中ちゆう常じゆう小せう憂う懷わい故ゆゑ小せう獄やく中ちゆうの囚い人の事ことハ思おもはる事ことなり亦また愚ぐ人にんの善ぜんや悪あくや辨べんる事ことハ飽あす事ことなり飲いん食じやくひ觀くわん樂らく事ことハ其その間まの心こゝろ地ぢの光かう音いん天てんに似にたり如ごとく是こゝハ正しやう法ぽう念ねん經ぎやうに依よりて註しゆと光かう音いん天てんの色いろ界がい十八じゅうはち天てんの中ちゆう第六だいろくの天てん多おほく名な義ぎ集じふ梵ぼん語ごの阿あ婆は會かいの事ことハ漢かん土どの光かう音いんと云いハ此こゝ天てんの事ことハ口くちより淨じやうき光かうを出いす事ことハ是こゝ則すなはち云いハ光かうハ

注釋童子教

三十一

声るる世界始る時光音天の人下り来り身光ありて飛行自在なりしと
阿含經に見る光を以て声と名く故に光音と名く音ハ色の事なり前
句の獄中との牽屋の事なり玉篇小二王始て獄あり殷子の姜里と云周の
圖圖と云則牽と云やう圖土ともちのめんハ ころたゆぬ
云り囚ハ字兼ハ罪人なりと云り父恩去高山須弥
文字の形口の中に人をもひ籠らう

山崗下 母後者深海 滄溟海還淺

是より下十四句が同皆父母の恩の最深き事と示と父の子を思ひ養ふの
恩ハ山よりも高くと須弥山ハ勝るると譬言ら須弥山ハ世界第一の高山
るの名義集ハ梵語ハ蘇迷盧といハ西域記ハ唐ハ妙高といハ右
妙にして高き心なる須弥といハ天生の古た詞なる觀經の疏ハ高き大い
三百三十六萬里と云り俱舍論の第一ハ八万由旬宝積經二十五の卷及び
長阿含經起世經のよハ八万四千由旬と説り何をも水より上へ出らる

鬼と云る水の中へ入る下ヤを亦ハ方由旬あり合して十六万由旬と云り以上
仏説る亦地耶代醉篇の三ハ崑崙山と須弥君山と云り東方那由他の
記より云り皇子年拾遺記卷十ハ崑崙山の西の方を須弥山と云り有
滄溟海といハ三大部の補註五ハ滄溟ハ海ると一ハ則記ハ水皆若君と色あり
仙人是と滄溟と云り亦水當ハ黒一是と眞海と云風る浪荒く
高き事百丈往來の難くと下集ハ滄溟海ハ大流の外あり
深さ九万由旬ありとあり心地觀經ハ云慈
父恩高如須弥山王悲母思深如大海
我若住世於一切二切一説不能盡
白骨者有入海

赤肉之母淫 赤之滯和 成五弊

身分
身の白死骨ハ父の淫精赤死肉ハ母の淫精なる滯とハ腎
の水より此二ツの水母の胎内にて和して人の身となる和といハ
和合の事交合して一固なる事ぞ滯ハ滯といハ字する兩

注釋童子段

の親の淫精の水の滴りて和して交て五臓とるる五臓ハ止観ハ頭面四支
と五臓とらハ四支とハ兩手兩足の事ぞ長阿含經ハ筒幹を加て六分とら
大藏法教三千ハ五臓ハ筋脈肉骨皮毛とあり是ハ胎生時天台大師の
十疑論ハ父母交會之時赤白和合耶是受生不淨とあり修行道
地經ハ云其小兒体而右二分一分從父一分從母身諸髮毛頰眼
舌喉心肝脾腎腸血軟者從母生自餘血齒骨節髓腦筋
脈堅者從父生從父生
氣胎内十月身心恒苦勞
師の頓
成苦提

要ハ日赤白二滯中神心方誌生既鬼胎内送言旬月七日一轉
十月間住とあり仔細ハ母の胎内まで三十八箇の七日を經る室積經
ホハ母の胎内ハ鬼也と一七日ハ一ツの風吹て形を次身ハ換て三十八度
の七日を經ハ二百六十六日あり九月とて世界ハ生を出る九月までと十月
ハ跨る故ハ十月と云るハ五王經ハ三十八箇の七日の外ハ四日を經と云り
法苑珠林ハ胎内ハ居住とる間ハ八位を經事を載るハ文長ハのハ

爰ハ累々と大般涅槃經九ハ云前哉我母受大苦惱滿足十月懷
抱我胎魯齊王相天地萬物造化論云天地二入三三三如九
九九八十一主一日日數十故人十月而生と云り次の句身心恒苦勞
と云ハ懷妊して居間ハ
生胎外數年蒙父母養
立あり居ハ胎身ハ心
も苦勞と云事あり

胎外ハ生むるとハ腹の中より生を出入事ありハ人ト生を出入り
三四年の間ハ父母の膝もとと離る事なく養育せらるなり數年
とハ六七歳までと云論語陽貨の編ハ子生三年然後免父母
之懷と云り毛詩ハ母我を生母
我ハ勤ハ我と母我と畜我と長
我ハ育ハ我と顧我と徳と云り

摩頂多年教父母懷養乳味數

斛

孝経に親生之膝下とあり子生きてより唇ハ父の膝の下に生ず
育摩頂して頭上を撫らして居が多年と云て歎の年を經あり
和音ふるもちぬハゆもてても鳥羽玉の吾思髪を撫まや有けん

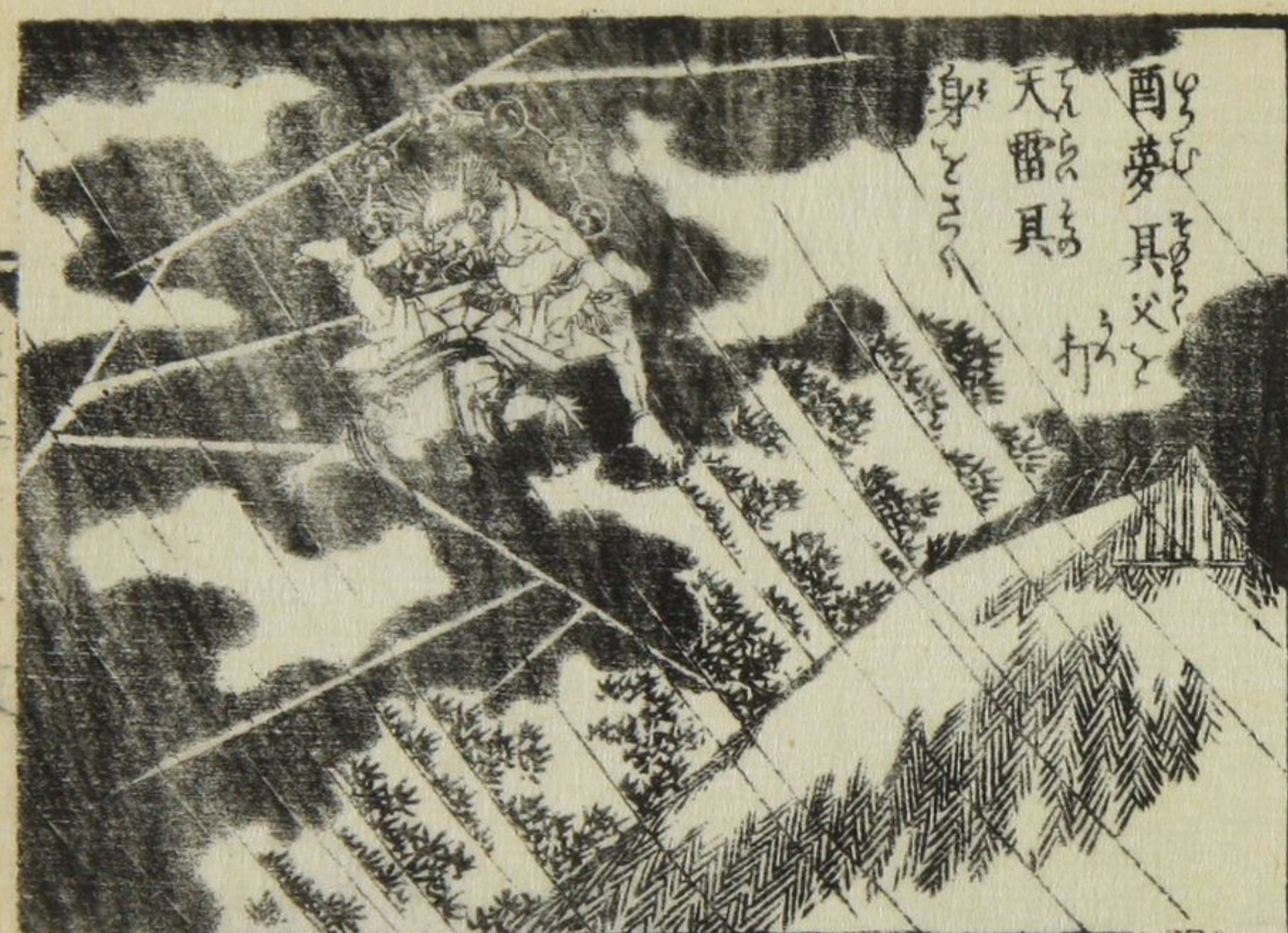
と遍照也此車有り夜ハ母の懐の中ハ抱きて臥るが乳を飲こと
何解とのみ事を知冷諸經要集第十三五道受生經云見生三
歳凡飲二百八十斛乳又父母恩重經云飲八斛四拜白乳と
あまハ恩重經云昆奈耶律
小云父母於子有大苦勞
護持長養資以乳哺

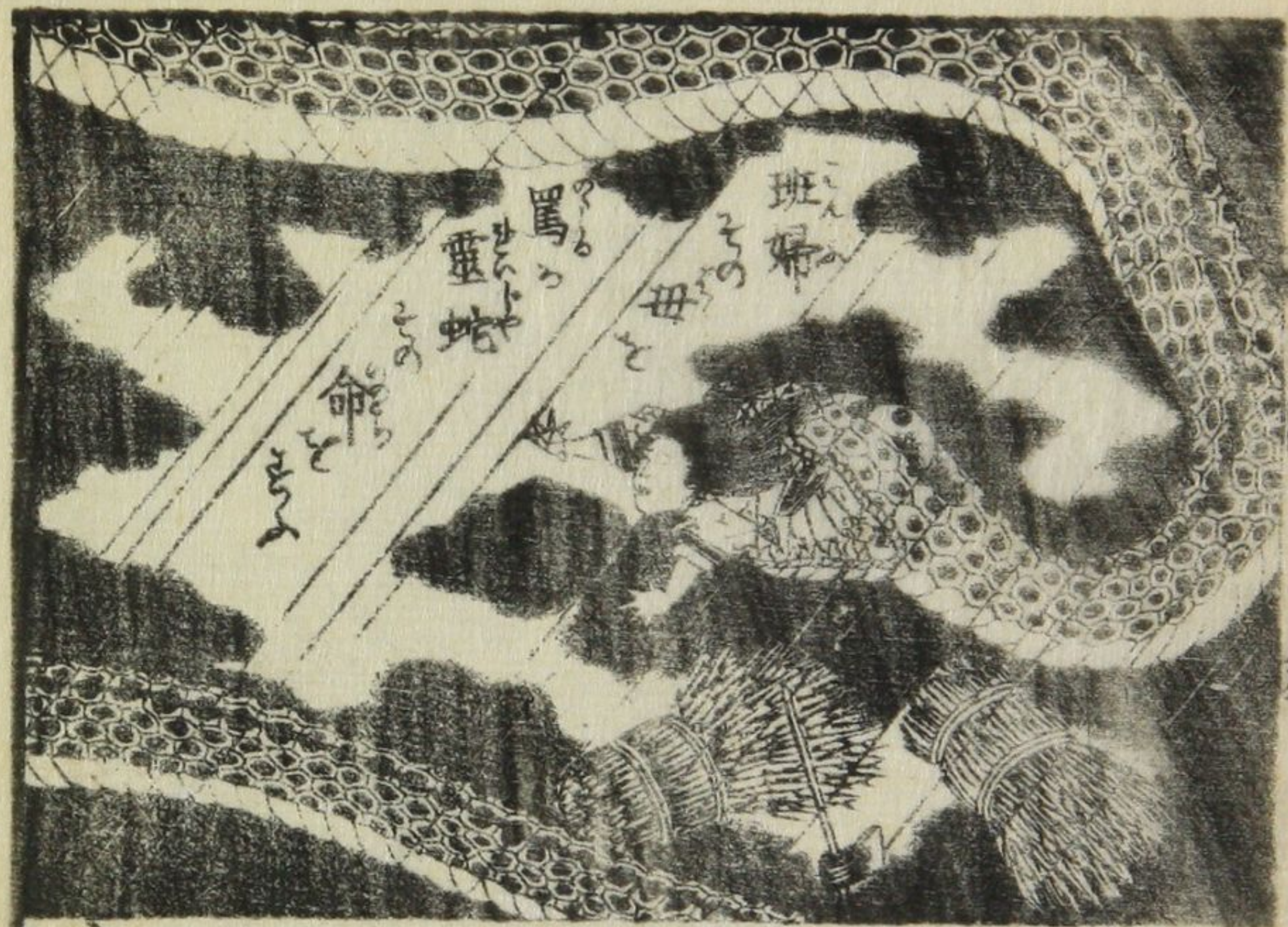
妻子 眷陸干江海漁鱗資身命

を殺し皮を賣肉を食ひて妻子を育を養ふまろり蹄とハ獸の足の事
を殺しても爰までハ獸の事なり次の句の鱗と云字を魚の事小まろり例ハ
咬ひてろり又夕暮ま江の邊海の遠れハ出て鱗と絶て是を賣又ハ

朝交干山野 殺蹄養

朝の山ハ
入野ハ
出て獸





食して我身命を資らるる鱗魚の事と物の命を殺事ハ大甚し
 罪多しとも妻子の爲に詮方なき斯る業ともする事あるべし淫靡
 經ハ十六種の悪を説給ハ中にも是亦の罪と入らむと観心畧
 要集子日漁父濟ハ河鱗
 背大士之兼濟微者之殺
 山野蹄亦産苦薩悲願
 爲資日暮命日秋

造悪業ハ嗜ハタ味多劫墜地獄

且暮トハ朝夕朝夕の命を資んが爲に日ハ夜も悪業をつくる
 悪業トハ悪業業あり佛も殺生と十悪業の第一とせし置置さるり
 梵網經の十重禁戒も殺生戒を初ハ置置さる朝夕味ハの喰ん
 と思ハ故ハ物の命をとると多劫の向地獄ハ墜る多劫ハ俱舎論
 小時の極て少死を利那と名け時の極て長死を名て劫と云とより殺
 生の罪より多くの劫の向地獄ハ墜て永く苦を爲すとの戒あり

主事童子教

戴恩不戴恩 如樹鳥枯枝 蒙德不

恩德 如野麻損草

人の恩ありてまこと知る者ハ毎
夜樹子宿る鳥の具樹の枝と枯
とやらぬ物あり亦人の執成ふる

智度論云も不知思人甚於畜生

酉夢打其父天

雷裂衣具身

岑象赤吉凶影響録の九卷ハ酉夢ハ唐の
世の人多ク其性至て不孝多ク常ハ薪を賣て世
を渡らる一日深山ハ入て薪を焚夜遅ク家ハ取り

雷電おびくはく太雷家の上ハ落くる酉夢と捕んで虚空子昇る

次の日具死骸を裂破て庭の前ハ落と近隣の人々會集りて是を
看み背の上ハ銘あり日酉夢打父天報裂身と云八字あり酉夢父を打
科ふらりて天の罰凍身を裂て捨らる大藏一覽云除勒舞

班婦罵其母

靈蛇吸其命

飛師正ガ括異記卷の七ハ班婦ハ一ハ幼
鐘山ハ居す常ハ不孝ふして母を叱り罵る
車絶と一日薪を焚て鐘山ハ登るハ忽ち大

郭巨為養母 堀穴得金全

孝子傳ハ日後漢の代郭巨字ハ文奉と云者あり一人の老母を養
ふ最孝行あり家貧にして常ハ食を妻一子を生て三歳ふる
むる老母孫の事るを愛して不足の食を分て與らる郭巨老母の

根いよくあつたを悲みて妻小告て曰家貧乏く母の食は終年て女
 中を分て吾子よ与らる子に依て弥母と飢と事最る乎夫婦の
 交り有バ子ハ再も得べし母ハ再び得べしと然バ此子を坑とやんて
 土中子埋べしと云妻も姑小孝行るをバ郭巨ガ意小随ハ夫婦とも小
 子を埋んとして坑を掘て二尺餘りする時土中より黄金の釜を掘りて
 金の上ふ文あり曰天贈孝子郭巨官不可奪人不可取とあり是
 郭巨富入とあり母の珍味を供て養ひ子とも心の依小育たり日
 記古事に曰く釜の量の名あり客六斗四升重さると有郭巨孝の徳
 みよして黄金一釜を得るる金と金と思ひ誤る蒙承三綱行実あり
 後漢書列傳
 七十四列女の傳
 有姜詩の
 益列廣漢郡の人あり母小事て孝心あり其妻龐氏の同郡龐益
 のる者の女あり是中も姑小仕て至て孝あり姜詩ガ母常に井の水
 と嫌て江湖の水を好り六七里一里右とありを妻の毎日江湖小行て

姜詩去自婦汲水得庭泉

水を汲来りて姑小進と一時大風雨小値て歸軒遅り故母大ら小
 渴しう姜詩妻の遅死と解て進出と妻小出さして実家小
 歸らと隣の家小寄食して晝夜行と積糸と紡て其價を得て
 珍味の食を求め具家の老母を憑て我贈りんと知ると暗小母の許へ
 贈るる餘り度重りけむ母不恋て是を問小今いと老母つゞは姜
 詩ガ夫一鬼の妻ガ贈りめると告る姑問て大い小感ト姜詩小説て
 是を呼飯うむ妻歸てほのめく孝行あるるは姜詩ガ子母小代
 アて江水と汲小行るるが過らして水小簡て死する母小知る悲ん事を
 怕して他所へ學問小遣しと云て隠おたり姑常に生魚の鱠を
 好て食と姜詩夫婦日毎魚を求て鱠を製て母小進む其後家
 の側小一箇の泉涌出て其味ハ江水と同事り亦此泉の中より毎
 朝鯉二尾づ浮そ出て遠死小行どと母の二ツの願と足ぬ此事小
 ありて姜詩自婦を去て
 庭小泉を得るると云う
 自婦との自妻の事也

孟宗哭竹中深雪中

拔草

孟宗が草二説あり晋の張方が楚國先賢傳孟宗の母常ふ草を好む其母死て後孟宗孝心のたる者なれば兼て母の好むる物をむす草と供て祭ると為り冬の時

生出し孟宗是を以母の亡後と祭る是皆天孝心を感ずる思ふ其の孫皎ふ仕て司空の官と為り亦孝子傳ふ曰孟仁字の恭武

江夏の人なり母ふ事て至て孝行る母常ふ草を好む食いと孟仁此故ふ常ふ草を用意して供けり冬の時節草生せと孟仁竹ふ抱きつたて大い哭く精靈是を感て是が鳥ふ竹の子生出しと斯の如く

二説あり三國の時張勃が撰び吳録と云る書ふ孟仁木の名ハ宗とあり始孟宗と呼後孟仁と改めり事と吳録ふ委冬の時節の事なるハ深雪の中と綴る事と

王祥款

叩氷堅凍上踊魚

昔書列傳卷三小王祥字子休微郡鄆臨沂の人なり生貧至て孝行る繼母朱氏ありて子を

憐す然も王祥のよく孝行る具饑常小生魚を好て食しけ

るが寒中ふ至て氷悉く氷て魚を得事や王祥大い小歎て衣服を脱て裸ふる氷の上ふ臥打破て魚を求む忽ち二献の鯉氷の間よ

と踊出さる本文此事を云る傳灯日記古事卷一孝子類の詩

小曰繼母有入間王祥無天下至今河水上一片卧氷摸らるの詩ハ王祥氷を温めて解さんと思ひ氷の上ふ卧て居るハ具氷ものから解

らり今ふ至るを其川

穿子養盲父 浣衣兩服

あり王祥が臥る形

閑

孟子離婁圖解ふ舜の父ハ目ハ有好惡と分る故小時の人瞽叟と名くとあり亦小説家ふ舜の父実小瞽叟なり舜是と詛り父の目霍然として閑と此説を以て本文を作らる盲父の瞽叟

涙泣ハ哭事なり孝子傳及び史記小舜姓ハ姚字ハ重也其父の名を瞽叟と呼り母ハ繼母あり象としり子あり繼母我子と愛して舜を惡む瞽叟小説言して舜を殺せしむ瞽叟后妻の説を信して

舜と殺んと計て倉の家頭を尊し、舜其謀計あり事を悟り密に蓋を
 二蓋を持って登り、瞽叟徑母と共に下より火を放て倉を燒舜二つの蓋を
 開て飛下り、一説みひらき持てのり是を時、瞽叟等其死をみて又舜を
 して井を掘り、是舜を埋んぬる隣の人、是を知り舜を告て早く他國
 小走せしむ舜が云、我唯父母を随て死て孝を盡さず、走て不孝を
 べらばと答へ隣の人、其心を感し憐れ、銀錢五百文を与ふ次の日ふり
 井を掘り、舜此錢を懐し隠して井に入、堀あぐる土、此錢をばりて
 掘る父母大の喜び、欲ひひきて舜を殺と事を遂くと其向隣の井
 の方へ逃、穴と堀深くるを、錢も及てず、其時父母より石を落し、下
 して舜を埋む舜、逃穴より隣へ遁せ、出岷山の麓に耕して隠れ居り、
 年々三百石の米を藏む、其後父の瞽叟、盲となり、継母の讒となり、
 啜とる天火、値て家と燒失ひ貧困やして、継母の薪を賣て飢寒を凌ぐ
 舜、是を見て悲し密に此薪を買錢をやり、食と与へ米と与へ、婦と斯
 くの事、數回有り、瞽叟不寒、小思ひ一時、妻と手と引、其鬼小到り、錢米
 を貫し、礼とのべ、只管喜び亦舜が色を伺て、若や你ハ我子の舜あり

まや青色よく似たりと云、舜竟み名のり合て、父子相抱きて大の哭、舜手
 と以て父の目と撫て、天み仰て悲む時、小忽ち父の兩眼開け、る母の目も物
 を、兩弟の望より、の云、是と以、涙を流し、と、兩眼開くと、本文云、此孝須四海
 小隠る、堯帝其聰明の徳を、伺て位を舜に譲り給へり
 舜此後位、小在事八十二載あり

刑堯、養老母、啜食成

樂史、孝悌録、卷十九、小刑、堯亦、會稽、昔の人あり、幼少、一
 て父と亡ひ、独の母と養ひ、至て孝行あり、常小母小食と進、と
 毎小先自ら食て、看て母小与ふ、母若病、小夜と寐、とて

看病、冬、冬へ床を温め、夏へ床を扇く、朝夕
 母小事、味ひを調へ、母の好む食物を供へ、介抱
 せ、母小年七十餘、常三、十許小見、とる

董永賣身

孝子傳、董永、後漢の代の人あり、幼死、時母
 と亡ひ、一人の父小孝行あり、人小備、並て耕作、
 小小、地、車小父と乘、せて、田、甫小伴、の、樹、蔭、小、居

備孝養御爰

董永 物言 耕作 けり 父死て家貧 けし 葬ふ 便あり 日 備々 家を行て 錢一 万文を借て 其代 子生涯 其家 子身を賣 一 譜代 其 物束 其 錢 子 葬 礼の具を調へ 送を 執行 して 歸ん ところ 路 あり 人の容色 美麗 女子 遇り 此 女 強て 董永 妻 成ん といふ 詮 方 多く 倡引て 主人の家 子 到る 女 主人 子 向ひ 董永 子 譜代 を 免 給へ 顔 主人 園て 鎌 三百 疋を 織 くら ば 許ん といふ 此 女 僅 子 一 月の 向ひ 鎌 三百 疋を 織 下 主人 具 功の 速 死を 怪 董永 子 身 放て 歸 夫婦 連て 夫 鬼 来りて 女 董永 子 對て 曰 我 天上の 織 女 あり 其 方 至 孝 天 子 通 夫 帝 感 して 給ひ 我 命 して 汝 債 償 せ 給ふ といふ 終りて 天上 へ 飛 去ぬ 列 仙 傳 あり 揚 威 念 獨 母 兇 前 啼 免 害 董永 子 子 載 揚 威 念 獨 母 兇 前 啼 免 害 此 織 女 生 ところ 李 蕪 言 忠 孝 圖 負 卷 揚 威 念 獨 母 兇 前 啼 免 害 山 入て 櫛 せり 一 回の大 兇 出来 揚 威 念 獨 母 兇 前 啼 免 害 我 一人の 老 母 あり 今 汝 小 啖 せ ば 母 行 成 行 願 汝 我 免 せ せ 跪 下 して

多 流石 子 猛 兇 兇 揚 威 念 獨 母 兇 前 啼 免 害 顔 烏 墓 負 墓 烏 墓 未 運 埋 兇 兇 揚 威 念 獨 母 兇 前 啼 免 害 逃 去て 揚 威 念 獨 母 兇 前 啼 免 害 廣 輿 記 卷 十 金 谷 府 人 物 類 漢 顔 烏 傷 負 墓 兇 兇 揚 威 念 獨 母 兇 前 啼 免 害 至て 親 孝 行 父 死て 其 墓 を 筑 不 して 土 負 運 けり 教 妻 の 烏 来て 土 含て 俱 塚 子 運 び 助 といふ 其 鬼 烏 皆 痛 傷 けり 故 小 土地 名 烏 傷 呼 たり 大明 一 統 志 卷 四 十 二 金 谷 府 陵 墓 集 中 小 顔 烏 墓 載 其 註 我 烏 墓 といふ 鬼 東 四 里 過て 石 碑 あり 云り 詩 学 大 成 卷 二 十 八 異 苑 部 子 東 陽 顔 烏 あり 亦 烏 傷 云 鬼 王 恭 改 りて 烏 孝 行 何 也 顔 烏 孝 行 の 言 云 べし

作 墓 世 間 流 布 書 皆 許 孜 誤 是 許 孜 廣 輿 記 卷 十 金 花 府 人 物 類 及 氏 族 排 韻 等 小 晋 許 孜 字 季 義 東 陽 人 二 親 死て 後 身 疲 骨 弱 哭 慙 顔 烏 孝 行 何 也 許 孜 自 作 墓 松 柏 也

土を負て墳を作る時一隻の鹿其植る松柏を損と許孜是を悲
 と哭たり明日其鹿外の獸子啖して死せりと廣輿記に載る其孝
 行を感して其里を孝須里と呼り大明一統志南幾志等も此孝
 順里を載り童子教本文松柏が自然生るるに因て是も
 實に許孜が松柏を植て墓を作しり許孜が孝隱る天子より旗
 と給りて其門と顯しり漢土の孝子也其事を書る旗を下
 して門口より建せし知れり此等の人のいふ
 孟蘭盆徑の新記に松柏を植て墓を植る
 墳墓を植る鬼の樹なりと云り

此等之者皆父母

孝養佛神重憐愍行願悉成乾
 此等の人の上の郭巨以下許孜を一人と云る此人の
 皆孝行の心深く天に通じて諸神諸佛の感應も憐
 と聖の願成乾満足せりと世に孝を尊ぶ物と云り

生死

命常早之快涅槃

人の命は定るる今日日
 死して涅槃の快死する無常
 常なる事と云る

故に早に菩提心を起して佛果を得て不生滅の涅槃を願ふ事
 有り涅槃の唐土にてハ滅度といふ盆徑の記に滅度と云る
 辭より悟り早に遺教經の節要に圓寂と義極と云るあり
 やんあるのこいあり

煩惱身不淨速可求菩提

煩惱の事あり貪
 欲嗔恚愚癡

の三の人の心と悩と云ふ
 智度論大藏一覽等に見る不淨
 根を求むべき事朝夕會嘆癡の三小
 提を求むべき事朝夕會嘆癡の三小
 云ふ有り名義集子道の
 提を求むべき事朝夕會嘆癡の三小
 と云り佛果の異名と云る

獸野獸野禽の會を空之羅

苦惱の六道 正者必成悲

此の世に於て此の法門の阿

苦惱の六道 正者必成悲 此の世に於て此の法門の阿... 衆生と成る故に悪道と云ふなり又祖庭事死すの苦忍とも云ふなり... 會者定離... 離る事有るの故に成るも成るなり... 六道... 衆生と成る故に悪道と云ふなり又祖庭事死すの苦忍とも云ふなり... 會者定離... 離る事有るの故に成るも成るなり... 六道... 衆生と成る故に悪道と云ふなり又祖庭事死すの苦忍とも云ふなり... 會者定離... 離る事有るの故に成るも成るなり... 六道...

壽命の蟬蟻の如し

死矣

聖者の知ぬ命を以て欲貪人を戒しむるなり人の壽命の蟬蟻... 論云壽極て長者不過三劫極短者朝生夕死といへり

身非芭蕉 隨風易壞矣

人の身は芭蕉の葉のやうな物で何とも無と思て居中小不平... 吹来すとて忽ち壊れ終るなり維摩經云日是我身如芭蕉中無有堅... 涅般示徑三十一小譬言如芭蕉生實則枯一切衆生身亦如是隨願往... 生經云四大假合形... 如芭蕉中無有實又... 如電光不得久停と有

綾羅錦綉衣 金銀寶具

生年童子散

貯

貯の美し衣裳を多く貯へ持て栄花を誇る人も死て冥途へゆく
錦の美し衣裳を多く貯へ持て栄花を誇る人も死て冥途へゆく

時の貯ふ
るるるるる
との事あり

黄金珠玉者只一世財寶

洪武正韻
小珠の珍貝
玉の宝王の

と右海より出る玉と珠と云山より出ると玉と云る黄金や珠玉の類
は来世の重宝と云るは唯生て居る間の寶なり妻子珍室及王位臨命終
時不随者と云るも此事を古麗居士といへる人珍室と水に沈し此世の

栄花は栄耀也更花佛の資

若の自ら曲む行ひ
有るもろく変て佛

道修行の資ありと云
妨と成りり經中より富
貴而此道難と見ゆ

官位寵職者唯現世名

聞

寵し増韻小尊榮ありと有職とい玉篇小上ありと然ハ尊は主
の死作あり人官位高き人あても現世あて人み崇敬せしむ名の因え
る許めて未來の頼あるは深の武帝の王位を捨て佛道修行

意の
音の

致亀鶴之契 露令木凋程

亀鶴の契
男女の
契あり契の

幼束とる事と是ハ十年も方羊も替やのそと幼束して夫婦はゆい暮す
も寔ハ野末の草の白露の消ぬ向りの命の向りと浅やハ男女の契を戒め
る漢書蘇武が傳ハ人生如朝露卓氏藻林三ハ朝露喻入不又存

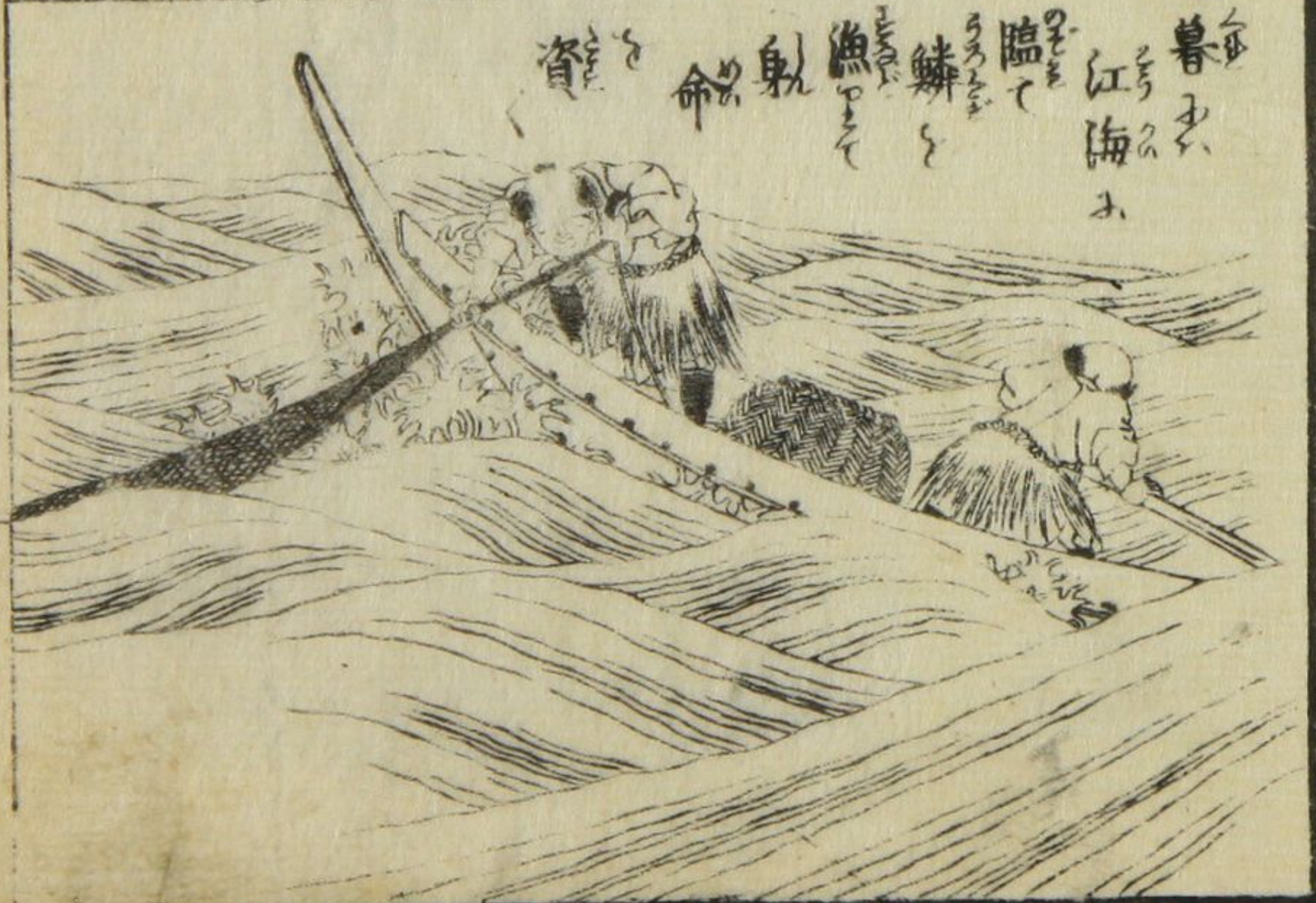
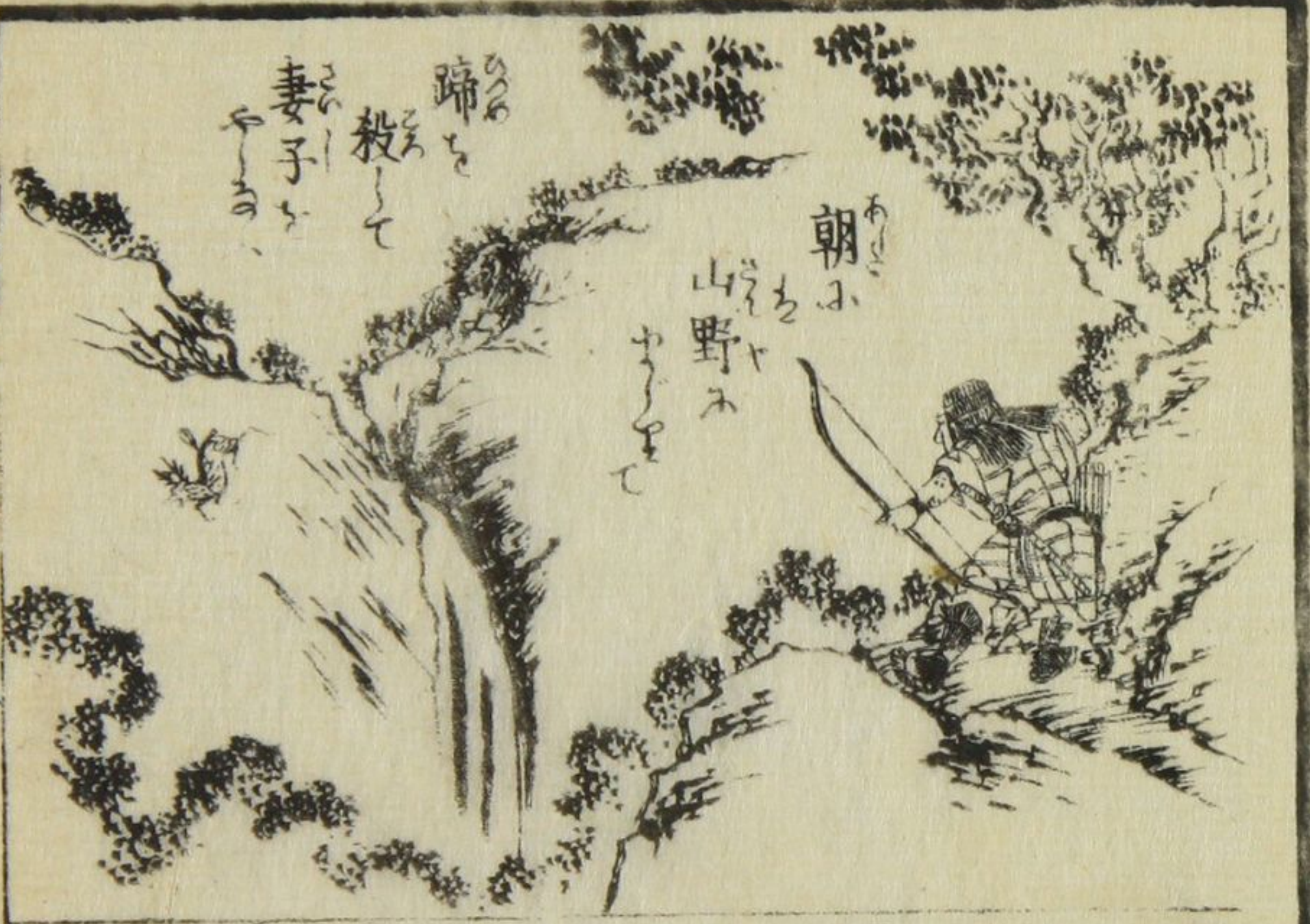
重死考の考の衣 身体不壞向

死鳥の考の衣
士みて夫婦中よハ

成とるも不辟言て夜具ふと鳥と除る是と死鳥考の衣と云とるの睡唯
中よ死鳥を色にあり西京雜記ハ趙飛燕ハ皇后ハ成し時且女身よ
と死鳥考を色にあり衣傳と贈し事あり天竺遺事ハ玄宗揚貴妃

の中ののれと被底一鴛鴦と云事あり文選古詩云客從遠方未
 遣我一端綺文珠雙鴛鴦裁為合歡被本草綱目小崔豹
 古今註引てト鴛鴦雄雌不相離入羅其一則相思而死
 謂之匹鳥老杜が
 詩云合歡尚有
 時鴛鴛不獨宿
 切利摩尼殿歎遷化曼曼

物利天あり法華文小爰ハ三十三と云と涅槃經の音義あらも
 利天あり三十三天と云と右繫と怕て爰名あり其第十三の天小摩尼
 藏天と云あり又善見大城とて金を築て築らる城あり門々ハ撞々の摩
 尼を以て飾らふ依て摩尼殿と号く委くハ佛祖統紀三十三小圖右
 摩尼とハ如意珠とハ玉の事あり因陀羅網とハ王と以て網と作て
 宮殿不掛てハ其毛の網日ハ映トとハ通り光輝くる観心界
 要集小如因陀羅網互相影現と有ハ是る化無常とハ性生
 要集小の切利天の如快樂極とハ結好る更小住天人もハ
 五衰とハ身小五の衰る事有る五衰とハハ頭上の化のク



注詳書一

一



孟宗
竹中
深雪の中
哭



王祥
氷を叩く
堅棟
魚

忽ち洞ひ二あひ天衣塵垢不汚る天衣天人の着衣服塵垢はらるる
 ろる二あひ服のFより汗出る四あ両眼はく踊く五あ本居と樂とと
 云り利天の人と斯の如くの悲とあり况や凡人樂と極りて苦と云るべし
大梵高真閣悲火血刀苦
 俱舎の疏に梵
 轉天の中み高
 接閣あり大梵

天と名く一主の居處中と更別地とあり次火血刀とい三途と云
 ろる四解脱經の中に地獄を火途道と名け餓鬼を刀途道と名け
 畜生を血途道と名く慈悲水懺ふ三途を二毒と對と火途と
 嗔怒と地獄と刀途の懼貪とて餓鬼と血途の愚疑と
 して畜生と詳る二藏法教卷十一あり孟蘭盆經會百通
 今記地獄は日夜燃る故火と云餓鬼は草を折刀にて殺し
 戦ふ故刀と云畜
 生は百子肉を喰血
 故血と云

須達平下後毒箭於毒箭

眞達と云ふ眞達長者の事あり勝軍王の大臣あり翻譯名義集二有
 十徳と云ふ天台大師の文句十徳一は姓貴と云ふ姓貴一は高位と云ふ高
 一ニハ大富と云ふ家大ハ富四ハ威猛と云ふ勢ハ猛一五ハ智深と云ふ智惠
 深一六ハ年若しと云ふ老て強一七ハ行押と云ふ行ハ正一八ハ禮備と云ふ禮儀備
 九ハ上歎と云ふ上ハ賞と云ふ下歸と云ふ下ハ者慕と云ふ尚委と云ふ文句
 浄名の既ハ有斯る十徳備マシ眞達長者も無常の使ハ留る事あり
 竟ハ祇樹給孤獨
 園ハ死リ臨終の
 釈迦譜卷の三ハ委

阿育之七寶 垂賞於壽命

是ハ阿育王あり名義集卷三帝王の篇ハ委一姓ハ孔雀名ハ阿育巴
 連邦邑一ハ三億家の有國と云ふ知ハ國王あり七宝と云ふ七ツの寶と云ふ
 藏一ハ一ハ一ハ七寶一ハ黄金二ハ白銀三ハ琉璃四ハ頗梨五ハ碎渠六ハ
 碼腦七ハ真珠あり其外巨萬の寶と云ふ死持ハ一ハ故ハ南閻浮提の内
 ハ八万四千の塔と云ふ建ハ一ハ事 釈迦譜卷五阿育王造八万四千塔記
 ハ委一ハ書リ日本ハ一ハ阿育王の塔と云ふ造ハ一ハ事 善覺子の弥陀偈

翼考の上ハ詳々あり斯レを財宝巨力と重ク國王を
 とも財を以て壽命ハ一ハ買事と云ふ一ハ竟ハ命終ハ一ハ事 月支
 雜阿含經ハ見ハ一ハ蔡伯嗜陳仲亨碑ハ命不可贖と云ふ

月支

還月威 彼縛於王使

月支ハ未考也但一ハ月支
 國ハ一ハ天竺あり月支
 威ハ一ハ人未考也唯法句

譬喻經ハ梵士兄弟四人あり各五通と得て天地と反覆ハ一ハ月支
 採山と遷一ハ流と止ハ然とも竟ハ七日の内ハ死ハ一ハ事と悟リ如何
 も一ハ此死と免ハ一ハ事と思ハ四人商議と云ハ一人ハ大海の中ハ隠
 一人ハ須弥山ハ隠ハ一人ハ虚空ハ隠ハ一人ハ市中ハ隠ハ然ハ一ハ其
 後七日と經て市中の一人忽ラ死ハ一ハ市の奉行此事と云ハ王ハ一ハ是
 と聞て心中ハ悟リハ一ハ市中の一人死ハ一ハ餘の三人も極て死ハ一ハ則
 佛の御許ハ至て問給ク一ハ返頃梵士四人兄弟ハ一ハ五通と得ク然ハ一ハ
 七日の間ハ死ハ一ハ事と悟て各四邊ハ一ハ隱ハ一ハ是能死と免ハ一ハ事と云ハ
 や佛告て王ハ一ハ告ハ一ハ人ハ一ハ四の事あり更ハ一ハ適ハ一ハ一ハ中一ハ中ハ一ハ

有て生を受さる事を得て二其既ふ生じて老を受さる事を得て三
 其已ふ老て病を受さる事を得て四其已ふ病て死を受さる事を得て
 教の事あり備ふ此事う次小琰玉の使に十王經一切衆生
 命終の時不臨て閻魔法王閻魔卒と遺る其一奪魄鬼具二
 を奪精鬼具三縛魄鬼と云り彼月を還威あるても琰王
 の使縛魄鬼の意を縛て行る琰王と閻王或は閻王
 名義集ふ

龍帝投錠方 彼打獄車杖

龍帝の古事の考に龍王なるに龍と投る程の力ありても竟ち死
 て冥途ふ到り獄卒の杖ふ打たる獄卒の觀佛三昧經ふ兩鼻
 地獄ふ十八獄卒あり口の夜刃の如く六十四の眼あり鉄丸を散す牙の
 狗の如く牙の端より火流る八の頭
 小六十の角あり角の端より火燃る其火
 化して刀輪と云り阿鼻城ふ備ふ

人尤可行施布施

菩提根 人心不惜財 財寶善菩提

障
 人小物を抱し与ると布施といふ未曾有經に布施ふ三の品あり
 一食物を施す二食物を施す三食物を施す
 人小金銀と与て貧を助るる法施の法と説きて衆生を

救ふる斯の如く是の時我菩提の根と云る糧の飯米の車糧と同事
 なる宝積經に云布施持戒等所作善因乃至具足修習一切佛法
 是名福德資糧月燈三昧經に曰布施是破慳貪之前障入正道之

初門菩薩能行此其目則
 獲十種利益也と委く
 大藏法數五十五卷小見

若人貧窮身無布施

財見他布施時 可生隨喜心

身分貧しく
 布施するに
 協する他の

人の布施を見て共小行て喜ひ... 佛須弥灯光如末の記別を授く... 悲心施人切徳

如大海為已施諸人得報如女子

真實の慈悲心より起し... 賢愚經曰施如芥子得報如山... 往生要集因果經を引ては文あり

人早研黄金膚

尊者大士論偈を引て云悲心以施... 黄金の光ある故小斯のあり... 折花供佛華

速結蓮曼跋

觀佛三昧經曰若以三華供養佛... 成金曼住行者前と云り此外佛小花

て勝て計り速に早に事なり蓮臺の時と結ぶる蓮華座の上の登りて結跏趺座して佛に成事ぞ結跏趺座の俗に云平座の事と東國にて安座と云西國にて常樂と云云法華方便品の偈に日若人散乱心乃至以二華一供養於畫像一團見無數佛科詩引賢愚經曰有長者生二男子天雨衆寶各名天華由前世以三華一散僧故出家證羅漢果と云云

一句信

受力起轉輪王位半偈聞法德

勝三千衆寶

華嚴經云若聞一句一偈未曾有法一勝三千大千世界滿中七寶及釋林轉輪王位とあり諸の經五字七字と一句といひ四句以上と一偈と云と西域記に見る半偈一偈の半分と云の偈令一句半偈の妙法を信じて受ても其力の大きい事三千世界の寶を得ることよりも國王の位を受くるよりも勝なりと云事なり秘藏宝論卷

中云滿界財寶不如一句之法恒沙身命不比四句之偈

上須求佛道中報四恩

下編及六道共成佛乃

佛の心を求て生れを出る事を大事とす是上求菩提

提りの中四恩を報さるる四恩と云父母の恩二師長の恩二國王の恩四小施主の恩なり釋氏要覽中卷小委心地觀經の父母の恩衆生の恩國王の恩三宝の恩此四の恩を報さるる下編六道を成

慈悲を及せし事然而我身も共成佛の道と云るべし是大衆心の至極なり法華經も皆共成佛道と有廣弘明集も云法門之為幸也上須諸佛中報四恩下爲合識二者不遺大考也とあり

為誘引初童註因果道理出内典

外典

げてんより 幼童のこころの事あり初より人生まで十年を初と云てりの學びはと云
 禮記曲禮ふあり亦童の二十歳より前と云揚仰伽經小授童蒙
と云是の註小童蒙言初機也と然を幼童もあつた年の
 せんといふ奇と初學の者の事あり委くと初小迹と云り若さ人小善因善
 果惡因惡果の道理と示と事内典外典より撰出とる語あり内典と云
 佛書外典と云儒書あり亦内教外教とも云此童子教ハ儒佛一道と
 以て撰物の事あり晋水淨源師と云りの見者易誅詩因
 發微録云域外治於心謂之内

見者易誅詩因

者不生矣

此書り幼年の者小學せんとて撰述とる物ありハ
 是と見者易誅詩事あり是と聞者易誅詩事あり
 笑べらんにとる誅詩ハと云事あり王篇小

童子教終

八島五岳註

誹ハ補浪切
 誹也入道具
 惡と見

皇都書林

富小路通三條上ル町

弘簡堂

須磨勘兵衛

